
恋姫無双～最強の傭兵～

ワタシは神(笑)だ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜最強の傭兵〜

【Nコード】

N51760

【作者名】

ワタシは神（笑）だ

【あらすじ】

恋姫の世界に來た少年（青年？）が無双するお話。

挨拶ですね…

一人の少年がいた。

少年は孤独だった。

孤独には慣れた。

使われたら棄てられる。

裏切りには慣れた。

俺を見る同情の視線。

偽善にも慣れた。

何も信用しない。

何も必要としない。

私腹を肥やす莫迦な奴ら。身の程をわきまえない塵ゴミ共。

この世界は腐ってる…

だったら…

コワしてしまえバイイ…

みたいなお話だけどそんなシリアスじゃ無いんだなあこれが（笑）

更新は不定期です。

アンチ&オリ主チートです。

それでもいい人はこの駄文を見ながら、ゆっくりして行ってね！

ブローグですね…

目がさめると、そこには真っ白な空間が広がっていた。

【…私はどこにいるのでしょうか…】

思考力は正常のようだ。

【……………此処は……………？】

状況を把握しようとしていると、背後に気配を感じ振り返る。

「ようこそ我が城へ」

そこにはいかにもナルシストで世界で一番のイケメーンは誰だい？はいあなた様です！と鏡の前で言ってそうなキモチワルイなにk…
「途轍もなく悪口を言われた気がするな。まあそれも仕方がないか。神であり、頭脳明晰、容姿端麗の私に対して嫉妬するなという方が酷というものだ。」

（…ウザいですねえ…。
消してもいいんでしょうか？）

「まあ貴様の嫉妬の話はこの際どうでもいい。」

【誰も嫉妬などしてませんが…。それよりも、先ほどあなた様は神とおっしゃいましたが、それはどういう意味です？それとここは何処ですか？】

自称神だが、礼儀を忘れず自分を低くして質問を投げかける。

「ふむ…まずは私は貴様たち人間から見て神とよばれる存在だ。神たちから見れば中級神といったところか。次にここだが貴様の世界にあるあの世と貴様が暮らす人界の境界線のような場所だ。」

その言葉を聞いて今まで閉じていた目を僅かに開かせる。

【おかしいですね…。それではまるで私が死にかけているように聞こえますが？】

「ほう…なかなか頭に回転が早いようだな、人間にしては上出来だ。その通りだ。貴様を殺してここに呼んだのは私だとも言っておこうか。」

その言葉を聞き、目が獰猛な肉食獣のようになる

【なぜこの様なことをしたのかうかがっても？】

怒りを抑えてそう問う。

「そんなものの私の暇つぶしに決まっておろう？ 巷で転生なるものが流行っておるそうなのでな、私もそのまねごとを試してみたのだ。付加能力は3つ好きな能力をやるうではないか！ それで問題あるまい？」

相手のその目からはすでに殺気が漏れ出しているのに気付かず、話を進める。

【「…そうですね…それで問題ありません…。では早速一つ目の願いですが、努力すればどこまでも成長する身体能力をください。」】

「ふむ…容易いな。可能だ。」

【次に私の任意でかたちを変えられる武器が欲しいですね。ああそれと、強度は神ですら殺せてしまえるほどに硬く鋭くお願いします。」】

「ほう…。まあいいだろう。可能だ！」

【最後に…私が明確な殺意を持って武器を手にしたときに、全ての

存在を殺せる能力をください。」

「なんだ？誰か殺したい奴でもいるのか？その能力は…ギリギリいけるな…。可能だ！以上でいいな？」

【はい。】

返事をする则自分の体が光り出した。

少しして手に違和感を感じ見てみると、そこには紋章がかかれた棒のようなものがあつた。

「それは貴様の意思によつて形が变化する。純粹な意思ならば鋭く美しく、歪んでいれば歪で禍々しくなる。」

【なるほど、有難う御座います。】

そう言いつつ武器を受け取つた瞬間に気味の悪い笑みを浮かべた。

「」

プロローグの続きですね…（前書き）

前回の続きです。

ゆっくりしていいね！

プロローグの続きですね…

神はそれに気付かず話を進める。

「次に貴様の行く世界についてだが…【ちょっとよろしいですか？】
…なんだ？」

神の言葉を遮り、疑問点を挙げる。

【別の世界とはどういうことでしょうか…？私が死んだ時の世界では無いのですか？】

「何を当たり前なことを…。一度神が関わったのだ。元の世界に転生できるはずが無かるう？」

…ブツン！

【テメエ…いい加減にしたらどうだ…ああ？】

あまりに自分勝手な物言いにとうとう堪忍袋の尾がキレた。

【テメエの都合で俺を殺したあげく…別の世界に行けだあ？】

「なっ！わ…私が言っておるのだぞ？！き…貴様は…！私の言うことを聞けばよいのだ…！」

今までと態度が急変し、信じられないほどの威圧感と殺気受けて、冷や汗を流しながらも、威嚇するかのように声を発する。

【私が言っているからだあ？テメエの指図なんざ受ける訳ねえだろおが…！

…そうだ。いいことを思いついた。クッククックッ】

そう言うと持っていた棒に神に対する殺意を流し込み始めた。すると、棒だったものが形を歪ませながら自分の想像通りの形となる。

【へッ！コイツアいい…！】

彼の手に握られていたのは、長さ2m50cmほどで、上下に青竜刀のような刃がついている槍。

しかしその刃は主人の願いを叶えようとするかのように脈動し禍々しく、かつ美しいモノだった。

「な…なんだ…ソレは…？殺意は負の感情！歪な形になり正確な形にならないはずだ…！」

神の声は震えており、恐怖により大声を出しているように感じた。それに対して、更なる恐怖に陥れる言葉を紡いだ。

【テムエが言っただぜえ？純粋な意思ならば鋭く美しくってなア！…俺の意思は純粋な殺意だぜえ？クツヒヤハハハハハ！！！！】

「ヒッ?!」

【さあて…問答も飽きたし、ゴミ掃除でも始めるかア？】

そう言って神との距離を徐々に詰めていく。

「く…来るな！わ…詫びてやるから！そうだ！世界が気に入らぬのだろう！？ならば貴様の行く世界を替えてやるう！どうだ!？」

歩は止まらずに更に距離を縮めてくる。

「な…ならば能力か！？能力が欲しいのだろう!？」

するとあと二歩程で間合いに入るところで止まった。
神は助かったと思い、望みの能力を聞き出そうとする。

「よ…よし。願いをいつてみせよ。私力で叶え」【アナタの…】…
なんだ？」

【アナタの命を下さい】

そう言つと、残りの間合いを一気に詰めて横に一閃した。

「なっ?!待っ…
ズシャ!!」

ドサッ

【ふう…柄にもなく高ぶってしまいましたね。ゴミ掃除も終わった
ことですし、別の世界とやらに行きますか。】

神の体が光の粒子になり消えていくのを横目で一瞬見てから、

【まあ一応便利な武器と能力を貰いましたし、戦国の世でも生きて
いけるでしょう…】

その点ではあのゴミに感謝しておくのでしょうか。】

カツ…カツ…カツ…

ゲートの前で振り返り、真っ白な空間に向かい執事のように礼をしつつ

【たいへんお世話になりましたね。御機嫌よう自称神様…クッヒヤハハハハハ！】

そう言ってゲートをくぐり抜けて行った。

プロローグの続きですね…（後書き）

ああ…

主人公なんか凄まじく悪くない…？

まあいつか！↑（いいのかよ！）

こんな感じで書いて行きますが、なにこれイミワカンナイ的なところがあったならやさしめに教えてくれると有りがたいです。

ではまた（〃。ω。）ノ

私の紹介ですね…（前書き）

タイトルの通りです。

私の紹介ですね…

名前

姓 張 名 宮 字 冷崩

真名 境

読み ちょう きゅう

れいほう

真名 はざま

容姿 上の下

整っているが、張りつけたような笑みと、彼の発する雰囲気ですれが台無しになっている。

髪 短髪で漆黒

服装 ゆったりとした服装を好んで着用（軍師などが着ているような服）

性格 仕事用と日常用の二種類がある。

仕事用の性格は相手を敬う言葉を使い、一切の感情を表面に出さない。しかし例外があり、極度に興奮したり、感情が高ぶると口調が変わり、対象を消すか、自分が満足するまで敵味方関係なく殺し尽くす。

日常用 張りつけたような笑みを浮かべて、何を考えているのかわからない…というよりもわからせないようにしている。子どもに若干甘い。

神に勝手に殺され、謝りもしない神を授かった能力の実験台にして殺した。

転生する前は傭兵をしており、その道の人が聞かないことはないほどの腕だった。通り名は「銃弾をくぐる者」、「瞬殺者」などがある。

身体能力が高く、特に速さでは、ほかの追隨を許さない。

転生後 ゲートをくぐると赤ん坊になっており、近くを通りかかった老夫婦に拾われる。後は本編で。

第一話ですね…（前書き）

なが…くはないか。

体調も悪いし、あちこちおかしいところがあると思っけど、

しょうがない！

ゆっくり見ていってね！

第一話ですね…

ゲートをくぐるとそこは小さな村の中のようなだった。

（やっと抜けましたか…。行き先も教えないで…。って私が言う前に殺したんでしたねえ。行き先を聞いてから掃除するべきでした…。）

今の場所の把握が出来ないため、若干後悔しつつ周りを見渡す。

すると向こうから老人が歩いてきた。

『あうあうだあ…。…うあ？』（申し訳ありません。…HA？）

「おやおや。こんな所になんで赤ん坊が…。かわいそうに、捨てられちゃったんか？わしが拾ってやるけえ安心しな。」

……赤ん坊だと！！！？

『だあゝ！あうあうあーう！？』

（訳がわからねえ！いったいどういうことだー！？）

「おうおう。よしよし、もう寂しくないからの。それとも腹が空いたか？うちに帰るまでの我慢じゃからなあ。」

『オギヤー！？』

（違いー！？）

こうしてこの世界で初めての会話？は終わった。

『だあゝ！！アッー！！』（話聞けゝ！！オーイ！！）

この爺さんに拾われて、二年が経った。…早い？聞く耳持たぬ！

…ゴメンナサイ。調子に乗りました。

この二年で私は新しいなを頂きました。

私の名は姓は張、名は宮、字は冷崩です。この名を聞いたとき一瞬で中国、しかも三国志がうかびました。

しかし、ここの世界は少し違うようです。名をつけて頂いたときに、真名というものも頂きました。私の真名は境と書いてはざまと言います。

この世界において、真名というものは命並みの重要性があるそうで

す。

（爺さんに聞きました。）

爺さんは昔傭兵をしており、なかなか強かったと聞きました。婆さんもいたのですが、一年前に他界。爺さんも吹っ切れたようなので、今は楽しく暮らしています。

そんな中、人生を変える事件が起こった。

現在私は六歳になりました。今は元傭兵の爺さんの指導の元、修行中です。

ガキン！ギャリギャリィ…！キンッ！

数秒の攻防の中で互いが互いを殺せそうな威力と速度で打ち合う。

「坊主！腕を上げたのう！」

『神楽爺こそ！歳を感じさせませんね！』

神楽というのは爺さんの真名である。

爺さんの槍が頬を掠った瞬間、境は一気に間合いを詰めて、境の武器である両刃槍を体の回転を利用して切り上げた。

「ぬう！！なんの！！」

しかし完全な間合いから繰り出される一閃を身をひねりかわす。

『そこです！！』

ヒュン！

先の一閃を避けた時に僅かに生じた隙をつき、首筋に刃を突きつけた。

「…ハア。参った…強くなったのう境！わしが教えることは無いかもしれないのう？」

『いえ、まだまだです。全盛期の神楽爺を倒せるくらいにはなりたいで。』

おどけて見せる爺さんに向かって謙虚に、しかし挑発的に言う。

「ガッハッハッハ！！ヒョッコが吠えるようになりおって！全盛期のわしに勝とうなど十年早いわ！」

現在の勝負の結果は15勝17敗26分け。若干境が負け越している。しかしこの15勝の内10勝は境が連勝しているので、最近はや爺さんよりも強くなっているのがわかる。

『フフフッ！その通りですね。では、そろそろ休憩n「賊が攻めてきたぞー！！」…できそうにありませんね…。」

頭らしき声が聞こえてくる。

頭「女とガキは捕まえろ！売れば金になるからな！男どもは皆殺しにしろ！」

「不味いのう…。境！わしは賊を退治してくるがお前は『私も行きます。』…覚悟はできてるか？」

『もちろんです！ゴミどもに誰の村を襲ったのか知らしめてやります！…』

「その心意気やよし！！では行くかの！」

2人はそれぞれ別の方向に走り出し、目の前の賊をなぎ倒してゆく。

【ギャー！なんだこいつ…ぐあ！ば…化け物だあ！！】

さまざまな賊の怒号や断末魔を聞き流しながら、先ほど指示を出していた頭と思わしき男の前まで辿り着く。

頭「ガキがあ！調子に乗っていられるのも今のうちだ！！」

すると明らかに間合いの外で、持っていた剣を横に薙いだ。
すると、水滴のようなものが飛散し、境の両の眼球を捉えた。

『ウグー！！あゝ あああアア！！』

熱い！痛い！熱い！痛い！

焼けるような痛みに悶えている境を見て頭は気分が良さそうに言った。

頭「ハッハッハッハ！！どうだ！そいつは毒草からしぼりとった毒だ！お前の目は二度と使いもんにならねえよ！！」

その言葉を聞き二度と光を見ることができない恐怖と、頭に対する怒りによって能力を発現させた。

『デメエは…許さねエ！！絶対えクロス！！』

毒で見えなくなった眼球は元々黒かった目が真っ赤に染まり、さながら悪魔のような形相で頭に殺気を向けた。

（何も見えねえ？ だったら感じればいい！ 視覚に頼らず聴覚と気配に頼れ！！）

頭「あ…悪魔だ…！く…来るんじゃない…！」

声によって場所を把握した境は一気に間合いを詰め、上下の刃で切り刻んだ。

『連刃瞬滅殺！！』

頭は声を上げることも許されず、境の手によって細切れになった。

「か…頭がやられたぞ！逃げろー！！」

一人の賊がそう叫ぶと蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

そこへ遅れてやって来た爺さんがこちらに声をかける。

「大丈夫か境！どこか怪我して…境その目…！」

『すみません神楽爺。敵の毒にやられてしまつて何も見えないんです…。』

それを聞いた爺さんは、

「済まんかった！わしがもつと早くここにきてりゃあこんな事には…！！」

『大丈夫ですよ神楽爺。少し不便になる程度です。気に病む必要はありません。』

爺さんに向かってそういうと、

『それになんだか、目がなくても周りの状況がわかるんですよ。訓練すれば心眼でも開眼できそうです。』

境はおどけながらそう言った。

実際境には周りは見えないが、そのぶん聴覚と空間把握能力が上がっているで周りの状況がわかっていた。

「ありがとう…。本当に済まない…！」

『もう気にしないで下さい。…さて！ゴミ掃除も終わった事ですし。帰りましょう、神楽爺』

そう言つと爺さんとともに家路についた。

この時の賊の生き残りがある村を守る小さな悪魔の噂を広めたことを境は知らない。

第一話ですね…（後書き）

どうですか？

変なことかあったら報告してくれると嬉しいです。

駄文ですが今後ともよろしく（＝。ω。）ノ

第二話ですね…（前書き）

グダグダ感が
いなめない…

連続投稿してる人が神に見えるのは俺だけじゃないはず！

第二話ですね…

賊の撃退から四年が経ち、私の年齢も十歳になりました。
十歳といえばポ。モンの主人公も旅にでる年頃…

チャキ…

『なんだか電波を受信したような…気のせいですかね…？』

…失礼しました。

元々身体能力が高かったこともあり、ここ一年の爺さんとの戦績は
全勝。全盛期の爺さんとやっただとしても、十合と武器を合わせず勝
つことが可能だろう。

しかし、爺さんも歳であり最近では体調を崩すことがよく見られるよ
うになってきた。

「ゴホッ…ゴホッ！…ハア…すまねえな。今日も修行はできねえ見
てえだ…」

『何を言っているんですか？訓練は一人でもすることが出来ます。
神楽爺はまず体を治すことを考えて下さい。』

「ははは…ちげえねゴホッ！ゴホゴホッ！」

爺さんは弱々しく笑うと、激しく咳こみはじめた。

『大丈夫ですか！？神楽爺！』

心配して駆け寄り背をさする。

「ハア…ああ…大丈夫だ…。境、お前にいっておかねえといけねえ事が、ある。」

神妙な顔で境と向き合う神楽爺、

『…なんでしょうか？』

今まで見たこともない爺さんの表情から、重要な話であることを察した境も、姿勢を正し次の言葉を待つ。

「境…。お前は強くなった…。お前に教えることは、もう、なんもないだろう。」

『なにを言っているんですか…。まだ教えて貰いたい事が…。最後まで聞きなさい。』…はい。』

あまりにも弱々しい爺さんの態度について反論してしまったが、最後

まで聞くよう注意されてしまう。

「最近の世の中を見てどうだ…？朝廷は腐り、飾りもんでしかない。…重税を課す役人どもや…弱いもんを襲う賊…。荒れておるじゃろう…？」

休憩をはさみつつ、問いかけてくる爺さん。

『…はい。そう思います…。諸侯が動き出していますし、群雄割拠の時代が来るのも時間の問題でしょう。』

境は、素直に自分が思っていたことを述べる。

「そうじゃ…。いずれはこの村も、戦乱に巻き込まれる…。賊に襲われようが…諸侯にとりこまれようがな…。」

『そう…ですね。』

境としても、この生まれ育ったこの村に愛着を持っており、賊に襲われるなど我慢のならないことだった。

「…そこでだ、境。お前は強く、よく頭もまわる。…この村を拠点

にして、傭兵稼業を始めては、どうかのう…？」

『傭兵…ですか？』

かつて神楽爺がやっていたもので、境も少なからず興味があったこの仕事に、若干気分を高揚させながら、爺さんに聞き返した。

「そうじゃ。…傭兵ならば、他にとらわれることなく、かつ高収入じゃ…。まあ、これは働きに応じた、金額になるじやろうがの…。」

『なるほど。村を襲ってくる賊を牽制しつつ、かつ好きなときに好きな方へつくことができますしね。』

「お前は…本当に頭がいいのう…。そうじゃ…。お前にはこの村を守りながら、諸侯に力を貸し、腐った賊や役人を叩きのめして貰いたいのじゃ。…じじいの最期のわがまを聞いて欲しい…頼む…。」

そう言い爺さんはあたまを下げた。

『最期だなんて縁起でもない…。神楽爺の願いはちゃんと聞きますから、頭を上げて下さい。』

最期という爺さんのことばに不安がよぎったが、それが杞憂であることを願いつつ、爺さんに頭を上げるよううながす。

「そうじゃの…。わしとしたことがつい弱気になってしまったわ…ハッハ…！ゴホッ！ゴホッ！」

『神楽爺！！血が…！』

爺さんの口からは血が出ており。先ほどの不安が一気にぶり返す。

「ハア…ハア…。バレてしまったの…。わしは、もう、長くはない…。だが、心残りはもう無い…。境が、この村を守ってくれと、約束してくれたからの…。」

爺さんはそう言うと、体を横にして境に微笑みかけた。

『しっかりしてください…。私を残してどこに逝こうと言っんですか？！神楽爺にはまだ教えて貰いたい事がたくさん…！』

爺さんに文句を言おうとするが、異変に気付く。

爺さんの胸が上下してないのだ。

これに気付いた瞬間、爺さんを起こそうと、体を揺する。

『か…神楽爺…？目を…目をあけてくださいよ…！神楽爺！か…ぐら爺…！』

ふ…ふざけんなよ…！まだ、まだ俺に教えてねえ事が山ほど残ってるんだろ…！』

目え開けるよ…！神楽爺…！』

うあああああ…！』

爺さんの呼吸、鼓動が無く目を覚まさない事がわかった瞬間、前世でも流すことがなかった涙を、ぼろぼろと流した。

爺さんが亡くなった事は、小さな村にすぐに知れ渡り、村の中でも人気があったことから村総出で葬儀を行った。

葬儀の中目の見えない私を気遣って、村の方が連れて行ってくれろと言っていたが、大丈夫だと言って断り、気配を頼りに葬儀場所まで移動した。

村人の手によって土葬され、墓が作られた。

境は墓の前で手を合わせながら、誓いを立てた。

『神楽爺…。約束は守るよ。絶対にこの村を守ってみせる。だから、安心して眠ってください。』

そう言つて目を閉じると、

「頑張れよ…。」

と言つ声が聞こえた気がした。

境は目を開け、墓に微笑みかけると、墓を後にした。

それからはや六年、境は見えない目の代わりに気配の察知を極めていた。さらに心眼を開眼させ、目が見えないということを感じさせない程に武を磨いていた。

ズシャツ！

賊「ぐああ！」

『ふう…。最近はやけに賊が多いですね…。やはり今の世の中の影響ですかねえ？』

かつて退けた賊の生き残りが二千の軍を率いて復讐にやって来たが、境に傷を作った者は誰一人もなく、今最後の一人を殺して何事も無かったかのように呟いた。

その頃、村を守護する悪魔の噂を聞き、一つの軍が活動を開始して

いた。

「????1「秋蘭！春蘭！あの悪魔の居場所が割れたわ。齡6の時に一人で賊の大將を討ち取った武…欲しいわ。なんとしても、悪魔を仲間に引き込むのよ！」

春「はい！華琳様！この私の武で必ずや仕留めてご覧にいきます！」

秋「…落ち着け、姉者。華琳様は捕らえよと言ったのだ。」

秋蘭と呼ばれた女性は早とちりをしている姉を宥めて、本来の目的を伝える。

春「何？悪魔の討伐では無かったのか？」

華「私はちゃんと言ったのだけれど？ちゃんと話を聞いていなかったのかしら…？」

華琳と呼ばれた少女は呆れつつも、諦めたような口調で春蘭に言った。

春「うう…。申し訳ございません…。」

春蘭はシュンとして華琳に謝った。

華「…ふう。もういいわ。今すぐ軍を整えて、出陣の用意よ!」

境の知らないところで境に一つの軍が迫っていた。

『…ツクシュン!ズズ…。…誰か噂でもしてるんでしょうかね…。』

…話題の中心は暢気に呟いていた。

第三話ですね…（前書き）

4日目にして

16000pv突破！

ユニークも3000以上

頂きました！

これがやる気に繋がるといいなあと思う作者です

第三話ですね…

こんにちは。私の名は張宮　冷崩。真名は境と申します。

くれぐれも！（さかい）とは読まないで下さいね…？

この前も近所の子ども達に

子「あ！さかい兄ちゃんだ！」

って指さされながら言われましたからね…。

まあ、その話は置いて、十六歳になった私の容姿でも教えて差し上げましょう。

髪は短髪と言うには長く、長髪と言うには短い中途半端な長さで、色は漆黒です。

顔は自分で言うのはアレですが、そこそこ整っていると思います。

その中で特徴的なのは、やはり目ですかね。黒目だった場所が、毒を受けた時に真っ赤に染まってしまいましたので、いつもは目を閉じて生活しております。

…え？生活に支障は無いのか？

そこは問題ありません。最近では気配察知能力が、バカみたいに高

くなりましたし、心眼を使えるようになりましたので、目が見えていた時となんの変わりもなく生活しております。

先ほど言ったように、目は問題ありませんが、現在別の問題が発生しております。

それは…

春「この村に棲むと言う悪魔を渡して貰おう！！抵抗するならば、我が大剣によって鉄槌を下す！！」

そつ…。一軍を率いた夏候の旗の武将が私に出てくるように吠えているんです。

大方、夏候惇將軍か夏候淵將軍のどちらかでしょうが…。

え？なぜ女性なのに夏候惇將軍か夏候淵將軍なのかわかったか？

…。
そんなの十六年もこの世界で生きていればこの異常にも慣れますよ…。

とりあえず、これ以上放置しておくとも暴れ出しそうですし…面倒ですが、逝くとしますか…。

神ゴミから貰った棒…神棒を手に持ち、夏候…（どっちだろう…）の前へ歩みでた。

『悪魔が何かは存じませんが…この村を守護している者、というの

は私で御座います。』

春「貴様が…？…嘘を吐くな！私が言っているのは、千以上の賊を半刻ほどで殲滅した瞬殺鬼の事だぞ？貴様のような軟弱そうな奴が瞬殺鬼のわけが無い！」

おお…呼ばれたからでてみたものの…理不尽くらいボロクソ言われましたね…。

この女…死にやがりたいんでしょうか…？

そんな物騒なことを考えていると、威圧的な女性に服がそっくりな冷静そうな女性が近づいた。

秋「落ちて着け姉者…この者が瞬殺鬼の可能性もあるだろう？」

春「だ…だが秋蘭！」

秋「済まなかったな…。急に威圧してしまって。気分を害したのなら謝ろう、この通りだ。」

春「秋蘭…。」

姉の反論を無視してこちらに謝罪してきた。

（この女性ならば話が通じそうですね。）

そう考えると、冷静な女性に体を向けた。

『いえいえ。お気になさらず…。私の名は張宮、字は冷崩と申します。宜しければ、名前を伺っても？』

（と言っても、先ほど姉と呼んでいたこの女性は、大方夏候淵將軍でしょうね…。つまりは先ほどの女性は夏候惇將軍…。産まれる順番が逆でしょう…。）

先ほどのやり取りでだいたいの見当はついているが、一応名前を聞く。

「秋「おっと、まだ名乗ってなかったな…。私は夏候淵、字は妙才だ。」

（やはり…ですか。それよりも…）

『よろしくお願ひします。ところで、先ほど私を呼んでいたようですが…何かご用でしょうか？』

先ほどの疑問を夏侯淵に問う。

秋「ああ…。すっかり忘れていた、我が主人の曹操様が、お前に会いたがっている。…ともに来てくれぬか？」

（面倒ですが、行くしかないでしょうね…。）

『…わかりました。それで、曹操殿はどちらに？』

秋「助かる。…こつちだ。ついてきてくれ。」

春「うう…。」

…なにやら恨みが籠もった視線を感じ、そちらを（心眼で）見ると
…涙目でこちらを睨む夏侯惇の姿が…

秋「ほら姉者、いつまでそうしているつもりだ？」

夏侯淵將軍は先ほどから気づいていたらしく、いつまでもこちらを睨む姉を連れて行こうとするが、

春「いや！やはりこいつがあの瞬殺鬼とは思えない！…おい！張宮と言ったな。私と勝負しろ！」

『え？いきなりですか？』

なにやら急展開である。

春「そうだ！私に勝ったなら華琳様に会わせてやろう！」

『…夏侯淵將軍？わざと負けてもよろしいでしょうか？』

今彼の頭の中には、

勝つ↓曹操と面会↓面倒くさい。

負ける↓会わなくて済む↓楽

の方程式が成り立っていた。

秋「…そのときは…姉者を侮辱したと見て、私も参戦するでしょう。」

「

『…全力デヤラセテイダキマス。』

夏侯淵が放つ、何やら黒いオーラに気圧されて、強制的に全力で戦う事になった。

秋「それでは、私が立会人になろう。勝負は武器を相手から落とされたり、決定打を受けた時。または、相手が降参したらでいいか？」

春「応！」

『構いませんよ。』

秋「それでは…始めっ！」

合図と共に、境が間合いをとり、お互いに向き合う形になる。

（まずは様子見ですね…。）

相手の出方をうかがっていると、夏候惇が口を開いた。

春「そういえば、まだ名乗ってなかったな！私の名は夏候惇！我が大剣で、貴様を打ち砕いてやろう！」

名乗りと同時に夏候惇將軍が間合いを詰めてきた。

だが境は微動だにせず、夏候惇に言い放った。

『名乗られたのなら、返すのが礼儀ですね。：私の名は張宮、字は冷崩。瞬殺鬼と言われる所以を、お見せしましょう。』

そっいつて微笑んだ。

春「ほざけ！」

間合いに入った夏侯惇は、驚異的な速度で大剣を振り下ろした。

しかし、

『…どこに剣を振り下ろしているんですか？』

春「っ！」

一瞬も目を離さなかったにも関わらず、境は夏侯惇の背後をとっていた。

『…では、次は私の番ですね…。絶対に目を離してはいけませんよ？』

そっいつて神棒を構えると、夏侯惇も脅威と感じたのか、全く隙の無い構えをとった。

…そう、隙は無かった筈なのに、次の瞬間には棒の先が夏侯惇の喉元に突きつけられていた。

春「ば…馬鹿な…。」

『行っただしょう？ 絶対に 目を離すなと…。』

端から見ていた夏侯淵にも何が起こったのかわからなかった。ただ一つわかったことは、

秋（強すぎる…。…瞬殺鬼の名は伊達じゃ無い、と言うことか…。）

目の前で起こった事に、恐怖を感じつつ、仲間になったらこれほど頼りになる者はいないだろう。と考えていた。

『…それでは、勝負も終わったことですし、曹操殿の下に参りますか…。』

そういつて、茫然としている二人に微笑んだ。

第四話ですね…（前書き）

PVが27000…？

ユニークが4000…？

…ふう？全く冗談がきついZE

…え？冗談じゃない…だと…？

皆さんこんな駄文に付き合ってくれてありがとうございます？

これを糧に一掃の努力をしていく所存です（ ）

第四話ですね…

こんにちは。張宮　冷崩こと境です。

只今夏侯姉妹に連れられて、曹操殿の下に向かっています。

春秋「『』……。『』」

…すごく…気まずいです…。

冷静な夏侯淵はわからないでもないが、異様なまでに静かな夏侯惇に気まずさを覚える境。

（先ほどの勝負を気にしているのでしょ…？それにしても、悔しいと言つよりも…悲しいという感情が伝わって来ますね…。）

しばらく歩くと、普通のものよりも大きな天幕が見えてきた。

秋「…こちらに華琳様がいらつしやる。お前を見る限り無いとは思
うが、失礼の無いようにな。」

そういつて天幕に入るよう促され、入り口をくぐり抜けた。

まず、最初に気づいたことは、異常なまでに大きな覇気…。そして、
それを放つ少女だった。

『失礼します。こちらに招待された、張宮 冷崩と申します。…あ
なた様が曹操殿でよろしいですか？』

華「…あら。ただの不男だと思ったのだけど、礼儀ぐらいは知って
いるようね？

改めて名乗らせて貰うわ。私の名は曹操 字は孟徳よ。…あなたが
最近噂の瞬殺鬼で間違いないかしら？」

『はい、その通りで御座います。…ところで、私を呼び出したとい
うことは、何かご用があるのでしょう？』

互いに自己紹介を終えたところで、境の方から本題を切りだした。

華「勿論あるわ。率直に言えば…貴方、私に仕える気は無いかしら
？」

『…はい？』

突然の仕官の話について行けず、曹操に聞き返してしまう。

華「だから、私に仕える気は無いかって聞いたのよ。」

意味理解した境は、自分の中にある答えを曹操に伝える。

『…申し訳ありませんが、その話はお断りさせて頂きます。』

そう答えると、曹操から凄まじい覇気が滲み出た。

華「へえ…。理由を聞いてもいいかしら？…もしかだらない理由なら…わかるわね？」

そういうと、境の首に曹操の武器である鎌、絶を突きつけた。

しかし、境は淡々と曹操の質問に答えた。

『はい、構いません。…私は傭兵であり、この村の守護者です。貴女の下に仕えてしまうと、傭兵として動くことはできませんし、この村からも離れなければならなくなるでしょう？』

自分の意見を曹操に伝えると、まだ納得はできないのか、表情は堅いまである。
すると曹操の口が開いた。

華「わざわざ傭兵なんて職に就かなくとも、私の下で武を振るえばいいじゃない…？それに、ここを守りとしてうちの兵を付けるわよ？それでも不満？」

今度は曹操が疑問に思ったことを問いかけてくる。

「…私の義理の祖父が元傭兵でして、私は祖父の跡を継ぎたかったです。…それに、この村を守護するのは、祖父の最期の願いでしたしね…。」

華「そうだったの…。でも惜しいわね…。貴方の力があれば私の軍はさらに強力になれるのだけど…。」

曹操は心底残念そうに言った。

それを見た境は罪悪感に見舞われ、曹操にこう言った。

「ああ…でも勘違いしないでください。私は傭兵。…仕えることは

できなくとも、依頼としてならいつでも曹操殿に力を貸しましょう。
貴女の依頼なら三割引で請け負いましょう。』

そういつて曹操に微笑みかけた。

華「ありがとう。そう言つて貰えると助かるわ。…じゃあ、早速依頼させて貰つても構わないかしら？」

『はい。私にできることなら何でも。』

そついうと身を正し、仕事用の引き締まつた空気をだす。

華「なら、最近話題になっている賊…黄巾党の討伐をお願いしますわ。」

『…ああ。あの頭に黄色い布を巻いた賊ですね。請け負いましょう。代金は私の仕事の量で決めて下さい。』

そつ言つて赤い木の板を曹操に差し出した。

華「…これは？」

曹操はその板を受け取りながら、境に何かを聞く。

『これは私が仕事を請け負った客に渡すものです。：私が依頼を成功させたなら、その板を砕いて下さい。失敗したのならその板を持って私の下にきてください。板と失敗料金を交換いたします。』

華「なるほどね。わかったわ。」

境が赤い板の意味を教えると、曹操は納得した表情を浮かべ、板を懐にしまった。

『曹操殿は私の常連になりそうですし、私のことはこれから真名の境とお呼びください。』

華「わかったわ。それじゃあ私の真名も受け取って頂戴？私の真名は華琳よ。」

これから長い付き合いになるであろうことを感じ互いに真名を交換した。

『わかりました華琳殿「かりん！」華琳…さん。これからもよろしく願います。』

仮にも自分よりも立場が上であり、かつ大事な客を呼び捨てにするのは気が引けたので、さん付けで呼ぶことにした。

華「はあ……。私は呼び捨てでも構わないのだけど……。そうだわ！
春蘭！秋蘭！入ってきて頂戴！」

春秋「「お呼びですか？華琳様。（華琳様！）」」

華琳が天幕の外に呼びかけると、ここまで案内してくれた二人が入ってきた。

華「ええ。ここにいる境が、私達に力を貸してくれることになったわ。私はもう真名を預けたから、あなた達も真名を預けなさい。」

秋「わかりました。…私の真名は秋蘭だ。お前と共に戦えることを、
光栄に思うよ。」

『私の方こそよろしくお願いします。私の真名は境です。受け取ってください。』

春「私の真名は春蘭だ！…どうした？珍しいものでも見たような顔

をして…。」

『…いえ…。なんだかやけに素直だと思ひまして…。』

春蘭が躊躇いもなく真名を預けることに不気味さを感じつつそういつた。

春「なっ！？失礼な！！華琳様！こいつに何か言っちゃってください！」

境の言葉にショックをうけ、華琳に助けを求める。

華「…春蘭。何かマズいものでも食べた…？」

春「華琳様！？そ…そんなことは断じてしてません！私はただ、純粹にこやつを武を認めただけです！！」

思わぬ裏切りに声を荒げ、自分が素直に真名を預けた理由を述べる。

華「春蘭を納得させるほどの武…。ますます興味が湧いてきたわ。」

『…ありがとうございます御座います春蘭さん。私の真名を境です。これからよろしく願いします。』

こちらをギラついた目で見てくる華琳に不安を覚えつつ、春蘭に真名を預けた。

この日の夜、酒の入った春蘭が、華琳に境と戦って負けた時のことを泣きながら話し、閨へと連れて行かれたのは、別の話…。

第四話ですね…（後書き）

ちゃんとできてるかなあ？

作者は下書きなんてしていません！

その場のインスピレーションを頼りに生きています。

ネタがなくなるといふ非常事態を避けるため、ネタの提供やこうしたらどうか？みたいな事を書いてくれると非常に助かります！

第五話ですね…（前書き）

こんにちは…。

眠いし、体調悪いしで何かいてるかわかんないところがあると思いますが、許して下さい。

第五話ですね…

グシャ！

ザクツ…ズ…ブシュウ！

山の上に立っている…。

…屍の山の上に…。

ただ、獲物を刈るだけ…。

逃げる者…命乞いをする者…戦いを挑む者…狂った者…泣き出す者…壊れた者…。

死んでしまえば皆同じ…

人とはもろく…儚く…悲しいモノ…。

どんなに強くても…威勢がよくても…覇気に満ちていても…馬鹿でも…王でも…恐怖の前にはただの人。

…そう…こんな風に…。

『ヒヤハハハハハ！！誰も逃がしやしねえ…。仲間外れは嫌だろオ？…今皆のところに、連れてって殺るよオオ！！ヒヤツハハハハハア！！』

賊「化け物だああ！逃げろお！」

賊「ひい！し…死にたくねえよお…！」

賊「やッやめてくれ！命だけは…ギャア！！」

血が大地を染める。

辺りに死体が大量に転がっており、周りには死臭が漂っている。

その光景はまさしく地獄だった。

境が戦っているのは黄巾党と呼ばれる賊の集団。

五千近くいた賊は、境の手によって桁を一つ減らされていた。

『…もうすぐ手前えらは全滅だ…。…選ばせてやるよ。今、俺に引き裂かれるか…。半刻もせずに到着する曹操軍によって蹂躪されるか…。二つに一つだ。』

賊からすれば理不尽な二択。

だが、賊も襲った村などでは同じようなことをしている。

彼等には生きる選択肢は残っていないのである。

賊「た…頼む！！助けてくれ！俺はもう悪さはしねえ！だから見逃してくれえ！！」

『そういつた人達を手前えらどおしてきたあ？…殺したんだろ？…こんな風になア！！』

ズバンツ！ブシャアア！

命乞いをしていた賊の頭を顔の中央で横に一閃した。

『…チツ！胸糞悪いなあ…。さつさと殺して、帰って寝るとするかあ。』

そういうと残りの賊の中へ突っ込んでいった。

境が突っ込む少し前…

華「秋蘭？境の姿が見えないのだけど…どこにいったか知らないかしら？」

境の村の近くで野営していた華琳は、朝になって境の姿が見えないことに疑問と小さな胸騒ぎを覚え、近くを通った秋蘭に境の居場所を聞こうとする。

秋「いえ…？そういえば昨日の酒盛りの後から、姿を見ていませんね…。」

しかし、秋蘭も覚えが無く、華琳は手詰まりになってしまった。

華「そう…。ありがとう。他のところでも探して…「伝令！」…どうかした？」

曹操軍の伝令兵が息を切らしながら華琳の前に現れた。

曹兵「はっ！ここから2時の方角、約二里の距離に黄巾党と思わしき賊の軍勢を発見！！その数約五千！！」

華「何ですって!？」

この村には境に会ったため、念のために連れてきていた兵が約千ほどしかいなく、五倍もある敵の数に絶望を感じていた。

華「くっ! いったいどうすれば...」報告!」今度はなに!？」

この状況を打開する案を考えているところに、またも伝令がやって来た。

曹兵「はっ! 賊の中に単騎で突っ込む人影を発見! 恐らく、張宮様ではないかと!」

華「なんですって!？」

その報告に華琳は今までの思案顔をやめ、目を見開いた。

しかしすぐに冷静を取り戻し、伝令兵に伝えた。

華「全軍に伝えなさい! 今すぐ出陣よ!」

曹兵「はっ!」

華（あのバカッ！死んでたら赦さないわよ！！）

華琳も戦の準備のため、その場を後にした。

境 side

（ふう…きりがね…無いですね。
しかし、すぐに華琳さんの軍が来るとしますし、今は耐えるとしますか…。）

目の前には境が殺した賊が無造作に転がっている。
しかし、殺しても殺しても減る様子が見られない賊に、だんだんイライラが積もっていった。

そこに賊の頭と思わしき声が響いた。

賊頭「おい！一人相手に何を手間取ってやがる！そんなガキさつさと殺っちまえ！！この先にある村を襲って、食糧と女を手に入れなきやいけねえんだからよ！」

その言葉は、イライラが募っている境には起爆剤でしかなかった。

ブチッ！

『手前えらがあの村を襲おうってんなら…こっちにもせよ考えがある…。』

賊頭「ああ？ガキ一人に何ができるって！？お前ら！やっちまえ！」

静かな殺気を溢れさせ佇む境に、賊たちの武器が殺到した。

しかし武器が当たることはなく、襲いかかった二十人ほどの賊が、体の一部を飛ばしながら地面に伏した。

『…できるさ…。手前えらを皆殺しにするくらい、わけはない…！』

そついうと境は自分の持てる殺気を全て、賊に向けた。

殺気を受け、怯える者…気絶する者…様々だったが、ただ一つ、立ち向かってくる者はいなかった。

賊頭「な…何なんだ！？お前は…！」

賊の頭は足を震わせながら、こちらに怒鳴った。

『…俺かあ？そんなのどうでもいいだろお？…手前えらは今から、八つ裂きにされるんだからなア！！ヒヤハハッ！！』

そついうと持っていた神棒を両刃槍に変化させて、閉じていた真つ赤な瞳を開いた。

賊頭「あ…ああ…！悪魔だああ…！
ズバンッ！

賊の頭が叫んだ瞬間、殺戮の幕は開けた。

華琳 side

華「！砂塵が見えたわ！…全軍駆け足！このまま突っ込むわよ！我が軍の強さを見せつけよ！！」

（もう少し！あと少し待ってなさい境！今助けるから！）

おや？華琳さんの軍が到着したみたいですね。

しかし少し遅刻と言ったところでしょいか…。

境の前には戦意を失った賊たちが二百ほどしかいなく、オーバーキルであることは目に見えていた。

（しょうがないですね…。面倒ですが、説得しに行くとしますか。）

そう考えると、残り僅かな賊に歩を進める。

賊「ひい！助けて下さい！もう賊は辞めます！だから助けて下さい
！！」

泣いて土下座する賊を見て、少々やりすぎた感が否めない境は、賊にある提案を出した。

『今からここに来るのは曹操殿の軍です。あなた達が賊から脚を洗い、曹操軍に仕官するなら、見逃して差し上げましょう。』

賊は顔を上げ境をみた後曹操軍を見て言った。

賊「…俺達は散々な事してきたのに、受け入れて貰えるでしょう

か…。」

賊の不安はもつともだが、安心させるように境が声をかける。

『大丈夫ですよ。私からも言っておけますから。かり…曹操さんも分らず屋ではありませんしね。』

そういつと賊は申し訳なさそうに頭を下げた。

しばらくして、華琳達が到着した。

華「境！無事！？」

境に駆け寄る華琳。

『ええ、体の血は全て返り血ですので。』

おどけて華琳に言う姿は、反省の色が見られない。
そんな境の態度に、華琳の雷が落ちた。

華「あなたねー！これだけ心配させておいて、謝罪の言葉も無いのかしら！？」

『おやおや怖い怖い。心配させるつもりは微塵もありませんでしたし。それに、依頼には、黄巾党を殺せと内容にあったはずですが？』

全く怖がる様子はなく、むしろ、笑みを浮かべて華琳に返す。

華「~~~~~！！」

何も言い返せず、齒噛みする華琳。

『おっと、忘れるところでした。私が改心させた黄巾党の皆さんが、貴女に仕官したいそうです。もう悪さは絶対しないでしょーし、よろしければ仕官させてやってください。』

境の後ろに佇む賊たちに目を向け、思索してから境に答えた。

華「…貴方が言うのだから問題は無いと思うけど…。元々は賊…。すぐに信用はできないわね。」

華琳からの返事は良いものでは無く、賊たちの顔に陰がさす。

華「でも……本当に、誠心誠意仕えると考えるなら、考えてあげるわ。」

しかし、華琳の思わぬ一言に、賊たちの顔に光が戻る。

賊「は……はい！誠心誠意、馬車馬のごとく働く所存です！！」

華「ふふふ……。威勢はいいようね。今後は私の下で……って、何を笑っているのかしら？境……。」

華琳に見えないように微笑んでいた境に、華琳が指摘した。

『フフフ……。いえ、華琳さんはなんだかんだ言って、優しいなと思っただけですよ。』

境は思ったことを素直に話し、華琳に答えた。

華「うう！／＼……。貴方はまたそうやって私をバカに……！」

恥ずかしさからか、顔を真っ赤にして、照れ隠しに境に当たる華琳。

『いやあ。あんまり怒ると、可愛い顔が台無しですよ？華琳さん。』

ブォン！

そこに、華琳の拳が飛ぶ。

しかし、それは空を切るばかり。

華「くう！当たりなさい！」

『嫌ですよ。当たったら痛いじゃ無いですか。』

華琳の拳をことごとく避けていた境は、身を翻して逃走した。

『なにやら身の危険を感じたので、失礼させて頂きます。』

華「待ちなさい！境！！」

その場に取り残された兵たちは、無邪気に走り回る主人に、温かい視線を送っていた。

『「いっちですよ。華琳さん。」』

華「は〜ぞ〜ま〜!!」

…続く

第六話ですね…（前書き）

昨日は更新できなくてすみませんでした。

明日も忙しくて出来て一話ですが、見捨てずに読み続けて欲しいと思います。

それでは本編をどうぞ！

第六話ですね…

皆さんこんにちは。

只今、華琳さん達に連れられて、対黄巾党連合軍の軍議に参加している、境です…。

なぜこうなったか…？

私が聞きたいくらいですよ…。

連合軍参加、前日…

華「貴方に、今回の戦に参加してもらおうわ。」

『……………はい？』

なんの前触れも無く、そんな事を言う華琳に、境は動きを止める。

『……華琳さん？何を仰っているんですか？』

自分の聞き間違えを信じて、華琳に再度言ってくれるよう頼む。

華「だから、貴方に黄巾軍と戦うときに、力を貸して欲しいって言ったのよ。」

『いやいや……。私はこの前、依頼を貴女から受けていますよ？……もしかしてボケました？』

前に聞いたような話しに、華琳の頭が心配になり真顔で聞き返す。

華「失礼ね！私の頭は正常よ！！……じゃなくて、最近活発になってきた黄巾党に、朝廷が肅正するよう言って来たの。それで、私のところにも参加するよう通達があったから、貴方にもきて欲しいって言ったのよ。」

一度境に反論したが、すぐに冷静になり、詳細を境に話す。

『なるほど、そういう事でしたか…。私はてつきり…。てつきり…何かしら?』…いえ、今日は天気が良いですねえ…。』

思わず口を滑らせそうになった境は、怒気を滲ませ静かに問いかける華琳に、話題を逸らし顔を背けた。

華「貴方は…。まあいいわ…。それで、返事を聞かせて貰えるかしら。」

『そうですね…。私は一人で戦うのが好ましいのですが（主に自分が暴走してしまうため）、賊の討伐絡みなら仕方ありませんね…。引き受けましょう。』

そういつて、連合軍の参加を引き受けたのだった。

（はあ…。ああは言いましたが、軍議に参加とか聞いていませんよ…。
…いや…。これはチャンスです！今後重要になる諸侯に売り出せば、なかなかの儲けが…！）

今までのネガティブな考えを一転させ、ポジティブに考える境。

何「それでは、軍議を始めよう。私はこの度連合軍を率いさせてもらう、何進だ。」

そう言つて幼「少女が前に出てきた。」

何「これより我々は、黄巾党の討伐にかかる。偵察の報告によれば、敵の数は約十万…。我々連合軍の方が約八万。数では我々が不利だが、何か策がある者は居らんか？」

何進の問いかけに、一人の女性が手を挙げた。

堅「私の名は孫堅、字を文台よ。相手はただの賊…。私達の精兵達で何とでもなるでしょう？それとも、策を弄する事をしなければ勝てないほど、あなた達の兵は弱いのかしら？」

髪が赤く、強気な目をした孫堅と名乗った女性は、挑発するような発言をし、諸侯を見渡した。

その視線に顔を歪める者が多くを占めていたが、境はその意図を理解し、一人納得の表情をしていた。

何「くっ…ならばそなたの軍は好きにするが良い！」

堅「勿論、そのつもりよ。…ぼそっ（慣れてない軍で下手に連携する方が危険なものね…）」

孫堅が小さな声で言った言葉は、諸侯の耳には入らなかったが、曹操と境はしっかりと聞いていた。

そして、孫堅は軍議場を去っていった。

何「くそっ！ああゆう輩が一番面倒くさい…！…さて、誰か策のある者は居らんか？」

再度同じ質問をする何進。

しかし、そこでまたもや軍議を荒らす者が現れた。

…華琳である。

華「何進將軍？私達も配置が終わったら好きにさせて貰うわ。行くわよ、境。」

『はい、只今。…それでは皆さん、失礼します。』

華琳に呼ばれ、軍議場を後にする際、優雅に一礼して去っていった。

何「ううゝ！！勝手にしろ！私はもう知らん！」

境の後ろからそんな声が響いた。

軍議場を後にした華琳と境だが、自分の天幕には戻らず、ある場所へ向かっていた。

『華琳さん？どこに行くのですか？…まあ大体の見当は付きますが…。』

華「分かってるなら、聞かなくても分かるでしょう？あえて言うなら、今後私の壁となる者に挨拶に行くのよ。」

境の予想通りの回答に内心溜め息を吐きながらも、興味があった人物との面会に心踊らせていた。

しばらく歩くと、ある人物の天幕の前まで来た。

そして、入り口を潜ると、そこにはこの天幕の主であり、自分達の目的の人物である孫堅の姿があった。

堅「あら…。挨拶も無しに入ってくるなんて、失礼だと思わないのかしら？」

口調は不機嫌だが、その顔には笑みが浮かんでいた。

華「失礼したわ。私は曹孟徳。…貴女に興味があつたから会いに来たわ。」

対する華琳も余裕の表情で言葉を返す。

堅「なるほどね…。それで…貴方は？」

華琳の横で静かに立っていた境に、何者かを問う。

『おっと…。これは失礼しました。私は張宮と申します。しがな
傭兵で、今は曹操殿の下に雇われています。
どうぞよろしく。』

自分の事を伝えたと、孫堅に一礼した。

堅「貴方…強いわね…。」

動作の一つ一つから、相手の力量がわかった孫堅は、値踏みするような眼差しで境を見た。

『…どうでしょうか？人並みだと思いますよ？』

華「貴方が人並みだったら、今頃大変なことになってるわね。」

はぐらかそうとした境の苦労を余所に、華琳は境が非凡であることをばらしてしまう。

堅「やっぱりね…。…ねえ、私と手合わせしてくれない？貴方みたいな、強い相手を探してたのよ。」

そう言って、孫堅は薄く笑みを浮かべた。

『…わかりました。少しだけですよ？』

境は如何にも面倒くさそうに返事をした。

そうして天幕を出ると、お互いに向き合い、武器を構えた。

華「私が審判して上げるわ。勝負はわかりやすく、気絶か降参で良
いかしら？」

堅「それでいいわ。早く始めましょう！」

孫堅は戦闘狂なのか、若干目が逝っている。

『…なんでこんな事に…はあ、さっさと終わらせますか。』

暴走気味の孫堅を見て、自棄になり始める境。

華「それじゃあ…始め!!」

華琳の合図と共に、二人の武器が交差した。

境が今回使っているのは、刃渡り一m程の片刃の大剣である。

堅「はああああ!!」

ガキン!

常人にはまず防げないであろう斬撃を、境は余裕こそ無いが危なげ

なく防ぐ。

ギンッ！

『ふっ！…次はこちらから行きますよ！』

ヒュン！ヒュヒュン！

大剣を軽々と振り回し、孫堅に連撃を仕掛ける。

ガンッ！ガッギン！

堅「ぐう！なかなかやるじゃない！」

攻撃が終わると、互いに距離をとって、最高の一撃を繰りだそうとする。

堅「久しぶりに全力でやると気持ちいいわねえ！…けどもう終わらせて貰うわよ…？」

孫堅は体を沈めると、五歩程の間合いを一気に詰め、境に切りかかった。

しかし、捉えたと思った瞬間、境は体を前に倒して避け、その勢いを使って孫堅に崩拳をたたき込んだ。

堅「がはっ…！」

もろに入った拳のせいで、まともに呼吸もできず。意識が朦朧としていた。

『私の勝ちで、よろしいですね？

久々に楽しい闘いでした。ありがとうございます。』

孫堅がやっと落ち着くと、手を差し伸べ、孫堅に礼を言った。

堅「…はあ…ふう…。…強いわね…。…こんなに全力で負けたのは、久しぶりよ…。…貴方に私の真名を預けたいんだけど、受け取ってくれる？」

『勿論。』

返事と同時に孫堅を立たせ、自然と向き合っ形になる。

堅「私の真名は清蓮^{しようれん}。貴方の武を認めて、真名を預けるわ。」

『ありがとうございます、御座います、清蓮さん。私の真名は境^{はな}です。受け取ってください。』

真名を受け取ると、自分の真名を相手に教える。

清「有り難く受け取るわ。これからよろしく、境！」

『こちらこそ、宜しくお願いします。』

そう言って握手すると、お互いに笑いあった。

華「……フンッ！」

華琳だけは面白く無さそうに、その光景を見ていた。

…続く。

第七話ですね…（前書き）

遅れてすみません？

体調不良と学校の課題で忙しくて手が着けられませんでした？？

これからの更新速度は、二日に一回か三日に一回になると思います。

第七話ですね…

清「ハッハッハ！お前は本当に面白いな！」

『いえいえ。清蓮さんも負けてませんよ？』

華「……むう…。」

こんにちは。
境です。

只今、清蓮さんと談笑中です。

何進將軍からの通達で、曹操軍と孫堅軍は両翼に展開することになりました。

賊の戦い方は、戦力を集中させた中央突破が主体ですので、他の軍との連携をとりたくない清蓮さんと華琳さんは、小さく笑みを浮かべていましたね。

…ところで…

華「むうゝ…。」

横で膨れている華琳さんが嫉妬のオーラを出していて恐いです…。

『華琳さん…？どうかしましたか？何か不機嫌なようですが…。』

わかっていても素直に指摘できる程、境は命知らずではない。

清「そうよ。そんなに顔を膨らませて…もっと笑いなさい。」

華「…別に！何でもないわ！」

清蓮の若干からかいの入った言葉に、ますます不機嫌になる華琳。

（しょうがないですね…。華琳さんの機嫌でもとりますか…。）

『そういえば、清蓮さんは結婚なんかはしてらっしゃるんですか？』

華「……………（ギロツ！）」

境の質問の意図が読めない華琳は、嫉妬と怒りが籠もった視線で境を睨む。

清「ええ。娘も三人いるわ。今も夫とは円満よ。」

華「……（ほっ）」

機嫌良く話す清蓮の言葉に、あからさまに安堵する華琳。そんな華琳を見て境は、悪戯心が沸々とわいてきた。

『どうしました？華琳さん。先程より大分機嫌が良さそうですね？』

華「えっ！？な…何でもないわよ！？」

焦ったように返す華琳に、さらに追い討ちをかける。

『そうですか？なら、先程不機嫌だった理由を教えてください？』

華「な…何でもないって言ってるでしょう！？」
ダッ！

『あ…逃げられてしまいました。』

あまりに核心をついてくる境に耐えられなくなったのか、身を翻して走り去ってしまった。

清「…境？あんまり華琳をからかったちゃダメよ？」

母が子を叱るように、清蓮が言う。

『すみません。華琳さんの反応が可愛かったもので、つい。』

清「そうね。」

ドーン！ドーン！

戦を知らせる銅鑼が鳴り響く。

二人は同時に立ち上がり、境は踵を返すと後ろにいる清蓮に向かって言った。

『互いに生きてたら、一緒に酒でも呑みましょう。』

清「…縁起でもない…。私には貴方が誰かに負けるなんて、想像も

つかないわ。…まあその時は、勝利を祝う酒になればいいわね。」

そうして、互いの陣に向けて歩を進めた。

陣に戻ると、こちらに華琳が歩いてきた。

華「遅いわよ！皆は既に準備を整えているわ。私の目指す霸道に貴方は必要不可欠なのだから、精一杯働いて頂戴。貴方には遊軍を任せるわ。宜しく頼むわね。」

『御意。依頼は必ず成功させますので、御心配なく…。』

華琳は王としての覇気を、境はまだ見ぬ敵への闘気を滲ませ、言葉を交わした。

華「貴方の働き…楽しみにしてるわ。」

そう言うと、戦を待つ兵達つわものの元へ、歩いていった。

『…言われずとも、期待以上の働きを見せましょう…。…さあて、今回は何人殺れっかなあ…?』

口の端を釣り上げ、歪んだ笑みを浮かべながら、境が受け持つ隊に向かつて歩き出した。

???「貴方が、曹操様が雇われた方ですね。私は、副官を任された徐晃と申します。隊の皆が隊長の言葉を待っております。どうぞこちらに」

徐晃と名乗った少女の後に続いて、隊列を組んだ兵士達の前に出る。

『初めまして。皆さんの隊を任された張宮と申します。私達は遊軍ですので、不利になった仲間の元に援護に向かう、または敵に突っ込むなど臨機応変に動かなくてはなりません。その分危険が伴いますが、相手は農民上がりの集まり…私達の力で蹴散らしてやりましょう!』

オオオオオー!!!!!!

徐「お見事です!これほどまで士気が高まるとは…感服致しました。

」

境が兵士への激励を終えると、徐晃が尊敬の眼差しでこちらを見ながら話しかけてきた。

『いえいえ。これ位貴女でもする事ができますよ。…ああ、私は隊と別行動を取るときがありますが、その場合は徐晃さんが指揮を執って下さい。』

徐「はい！了解しました。」

会話を終えると、兵士達と共に賊へと行軍を始めた。

『それでは始めましょう…一方的な虐殺を…！』

そう言うと、境が先陣を切り、戦いの火蓋が切って落とされた。

第八話ですね…（前書き）

少々長くなりました。

ゆっくりみていてね！

第八話ですね…

ぐあああ！！

ギャー！

こんにちは皆さん。

只今敵陣に突撃をかけているところです。

しかし、やはり賊は賊…私を楽しませる程の武を持った人はなかなかいませんねえ。

…おっと、若干押されているようです。助けに行くとしましょうか。

徐「…くっ！怯むな！一気に押し返せ！！」

『徐晃さん、ここからは別行動です。貴女達は右翼の援護にいつてください。…ここは私が引き受けましょう。』

指揮を執る徐晃の隣に移動し、援護に向かうように言う。

徐「隊長！？な…何を言っているんですか！いくら隊長と云えどこの数を相手に…」心配は無用です。それよりも援軍さっさと援護に

向かいなさい。』…もう！知りませんよ！？…全軍！これより私達は味方右翼の援護に向かう！ここは隊長が引き受ける！行くぞ！…御武運を…。」

『任せて下さい。』

徐晃に指揮を任せ、隊が移動を開始すると、境は殿としてそこに佇んでいた。

賊「何だ？一人置いて退いちまったぞ？」

賊「良いじゃねえか！…一人じゃあ物足りねえが、殺っちまえ！！」

賊が境に向かって走り出し、賊の刃が境に届く一瞬前に境は誰にも聞こえない音量で呟いた。

『…さあ。パーティー（虐殺）の始まりだ…。』

次の瞬間、境の世界に音が消え、断末魔の表情を浮かべた賊達が、宙に舞っていた。

『次は…どいつだア？』

なにも映さない真っ赤な瞳で賊達を睨み、口を三日月のように歪ませて、凄まじい殺気を放った。

賊「に…人間じゃねえ。」

賊「だ、だが相手は一人だ！一斉にかかれば怖くねえ！」

誰かがそう叫んで突っ込んでくるが、境にはもつどうでも良かった。

何故なら…

相手が皆死ぬのは変わらないのだから…。

『数は…凡そ二万つてところか。…半刻もありや十分な数だなア。』

そう言うとき賊の中に切り込み、愛用の両刃槍を振りながら叫んだ。

『俺の名は張宮！瞬殺鬼の名を持って、手前エらを皆殺しにしてやるよ…！』

その名乗りは、賊達にとって死刑宣告でしか無かった。

『…ヒヤッハアア!!…大分減ったなア。』

賊も残りが二千程になり周りを見渡してみると、ギリギリ見えるところに賊が宙を舞う姿が見えた。

『…んだア?…面白そうだな。こっちが終わったら行ってみるか…。』

そして賊に向き合つと、槍を回転させ始める。

『予定ができたんでなあ。さっさと終わらせて貰うぜエ。』

そう言つと、今までの比にならない速度で間合いを詰めると、近くにいた賊の首が全て跳んだ。

『…秘技、鬼の首塚。』

もはや賊に為すすべはなく、自分の首が跳ぶのを待つしかなかった。

丁度半刻が経ち、その場に立っているのは境だけになった。

『いやあ。満足、満足。ここまで殺したのは初めてですね。…では、先程の場所に向かうとしますか。』

呟きながら、先程賊が宙を舞っていた場所に歩を進めた。

しばらくすると現場にたどり着き、その原因が見つかった。

『…ほう…?』

自分よりも速さは無いが、力強さがある。

自分よりも経験は無いが、センスがある。

そこには身の丈程の戟を持った、真つ赤な鬼神がいた。

side???

賊「女一人に何手間取ってやがる！！困んでやっちまえ！」

少女に勝てないことに苛ついた賊達が、少女に向かって一斉に攻撃を仕掛ける。
しかし、

???「…五月蠅い。」

武器は彼女に届くことはなく、一振りで十の命が散った。

賊「く…この化け物め！」

賊の一人が少女を罵る。

???「……………それでもいい。……………月と、家族の為なら……………」

罵声をものともせず、手に握られた戟を担ぐと、短く名乗りを上げた。

呂「……………呂布。……………行く……………」

呂布と名乗った少女は、一振りで何人もの命を散らし、目の前の賊達を紙切れのように斬り伏せていく。

それはまさに鬼神と呼ぶに相応しかった。

しかし、彼女も人の子。自分の斬った賊達のせいで、徐々に足の踏み場は無くなり、自由に動ける範囲が狭まっていく。

呂「……っ…邪魔…っ！」

遂に足場は埋まり、賊の流した血によって、体勢を崩してしまう。

賊「死ねええ!!」

相手はそんな好機を逃すわけはなく、命を奪うべく踏み込んだ。

ガキンッ!

呂「っ!……………え?」

『こんにちは。…手を貸しましょうか?』

そこには…体勢を崩した自分に視線を合わせ、頭上で賊の武器を受け止めながら、こちらに微笑みかけるこの戦場のもう一人の鬼がい

た。

s i d e 境

ガキンッ！

（…ふう…。危ないところでしたね。この娘なら大丈夫だと思わずに早めに加勢すべきでした。）

『こんにちは。…手を貸しましょうか？』

境は少女に視線を合わせ、問いかけた。

賊「無視してんじゃねえ！」

そんな境に苛ついたのか…または急に現れた境に恐怖したのか、息を荒げて武器を再度振り下ろしてきた。

『…まずは五月蠅いゴミの掃除ですね…。』

ザシュ…

言っが早い、後ろに向けて刃を突き出し、賊を貫いていた。

『…それで、どうしますか？』

二度目の問いかけに応じたのか、ゆつくりと口を開いた。

呂「……………お願い……。…………こいつら倒すの、大変……。」

その答えに満足したのか、少女の手を引き立ち上がらせると、微笑みながら自己紹介した。

『私の名は張宮と申します。貴女の名は？』

呂「……………呂布……。」

『それでは呂布さん、私の背中お任せしますよ？』

呂「……………恋でいい。…………恋の背中も任せる。」

そう言つと、互いの目で合図し同時に賊の中へ突っ込んだ。

二人はまるで昔から一緒に戦っていたかのように息を合わせ、舞を踊っているかのように美しい武だった。

二人が踊った後にはなにも残らず、一万はいた賊はあっという間にいなくなった。

『ふう。楽しい一時でした。また一緒に戦いたいものですね。』

恋「…恋も、楽しかった。……………今度は、張宮と闘ってみたい…。」

恋は境と向き合つと、無表情だった顔に笑みを浮かべた。

『…それは楽しみですね。そうだ、これからは私の事は境と呼んでください。真名を預かつてなにも返さない訳にもいきませんし…何より、貴女とは仲良くしたいですね。』

境が初めて背中を任せた恋を認め、自分の真名を預ける。

恋「……………わかった。……………次は…「恋殿——！！」…ん。」

恋が何か言おうとすると、向こうからこちらに向かってくる小さな影が見えた。

???「…ちんきゅーキーック！」

その影は何故か境に向かってけりを放ってきた。

しかし、

恋「…ねね、ダメ…。」

恋の手によって遮られてしまった。

???「何故ですか恋殿！？この不届き者を成敗してやるのです！
！」

恋「……………めっ…。」

???「恋殿…！？」

何やら騒がしくなってしまったが、境は恋に向かって問いかける。

『…恋さん、そちらの方は…「ちんきゅーキーック！」おっと。』

が、途中で小さな少女に阻まれてしまった。

???「お前のような馬の骨が恋殿の真名を呼ぶとは何事ですか！
！ねねが懲らしめて…「めっ！」恋殿ー！？」

恋「……恋が許した。……ねねも言って…。」

???「し、しかし恋殿！…ねね…」…分かりました…。」

ねねと呼ばれた少女は、こちらを睨みつけると、敵意を剥き出しにしながら名乗った。

陳「ねねの名は張宮と言うです！…仕方なく名乗ったんですから、
そっちも名乗るがいいです！」

そう言うと、此方を指差した。

『…これは…申し遅れました。私の名は張宮と申します。以後お見
知り置きを。』

張宮は自分でも気付いているが、子どもに甘い節があり、見た目子どもの陳宮からの罵声を殆ど許していたので、優雅に一礼しながら陳宮に名乗った。

陳「う…うむ。…苦しゅうないのです…。」

自分が罵った相手に、礼儀正しく挨拶され、戸惑う陳宮。

『そう言えば、恋さんとは先程知り合いましたねえ。少しの間共闘させて頂いたんですよ。』

恋「……ん。……助けて貰った。」

…説明中…

自分がという経緯で恋と知り合ったのか、陳宮に細かく伝えていくと、自分の勘違いに気付いたのかあたふたし始めた。

陳「そ…そのような事が…。張宮殿…申し訳なかったのです…。」

自分の失敗に落ち込み、うなだれながら境に謝った。

『いえいえ。誰にでも失敗はあるものですし、もう気にしてはいま

せんで。』

優しく声を掛けて、頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めた。

陳「ありがとうございます！恋殿を救ってくれたお礼に、ねねの真名を授けるのです！ねねの真名は音々音と言うです。ねねと呼んでいいのです！」

満面の笑顔でお礼を言うと、境に真名を教えた。

『ふむ。それでは、私も真名を教えますね。私は境と申します。宜しく願いしますね、ねねさん。』

境も真名を預け、ねねに向かって手を差し出すと、初めはきょとんとしていたが、境の意図に気付きねねも手を前に出した。

音「宜しくなのです！境殿！」

そう言って握手をしたところで、味方の銅鑼が鳴り響いた。

ドーン！ドーン！

『…おや。…それでは行きますね。私の副官も気になりますし。』

そう言うと踵を返し、数歩進んだところで恋達の方に振り返ると、一礼しながら言った。

『また、お会いしましょう。』

そして境は徐晃の元に向かった。

続く…

第九話ですね…（前書き）

編集しました！

お見苦しい文章を見せてすみませんでした。

第九話ですね…

side 徐晃

徐「これより、賊に横撃を仕掛けます！全軍突撃ー！！」

こんにちは、徐晃です。

隊長に援軍に向かうように言われた後、すぐさま移動し、機会を窺っていましたが、敵方が漸く隙を見せたので突撃を仕掛ける事にしました。

突然現れた私達に賊は怯み、総崩れとなって撤退していきます。

兵も疲労してきていますし、次の行動に移るにも隊長と合流しなければ、兵の士気に関わります。

徐「うう…隊長どこにいるんですか…」。

戦場の騒音に、少女の眩きはかき消された。

side 境

『ふむ…。困りましたね……。…………迷いました。』

徐晃の元に向かっていた筈の境だが、途中で賊との戦闘を重ねるうちに自分のいる場所が分からなくなっていた。

『この方向で合っている筈なのですが…ううむ、どうしたものか…おや?』

境が一人唸っていると、前方で戦闘しているのを感じた。

『このまま宛てなく歩くのもアレですし…行ってみるとしますか。』

そう呟くと、そちらに向かって移動を始めた。

そこには孫の旗が掲げて、敵を呑み込む兵達の姿が見えた。

『流石清蓮さんですね、大将自ら先陣を切るとは…おや?』

よく気配を辿ってみると、清蓮と似たような気配がもう一つあり、孫の旗も二つある事に気付いた。

『あれは…清蓮さんの娘さん…でしょうか?…見てるだけじゃあつまらないですし、加勢に行くとしますか!』

そう言うと賊に向けて、弾丸のような速度で走り出した。

s i d e 清蓮

清「我らが押しているぞ!一気に食らいつくせ!」

もう、張り合いが無いわね。

もう少し手応えがある敵が欲しいのに…。

境と闘ったときは凄かったわ…って、あれ境じゃない!?何でここにいるのよ!

…まあいつか。

境、貴方に私達の戦を見せてあげる。

江東の虎と呼ばれる私の戦をね♪

side 境

何やら寒気を感じたんですが…気のせいですかね？

まあそれは置いて、清蓮さんはこちらに気付いたようですね。
…まあここまであからさまに突っ込んで、気付かないのもおかしいな話ですが…。

さあて…殺るとしますかね…。

賊「な…なんだこいつ…ギャー！」
賊「クソッ！死にやがれ！」

ガキイ！

『その言葉、そっくりそのままお返しします。』
ズシャ！

賊の攻撃をもとめせず、斬り返し蹂躪していく。

そこに、背後から賊が現れ、こちらに斬りかかってきた。

賊「オラアア！」

決して反応できない速度ではなかったが、振り返ろうとした瞬間、賊の血で足を滑らせてしまった。

『ッ！クソ…。』

（恋さんと同じ状況になってしまうとは…。しかし、急所だけでも！）

せめて急所だけでも外そうと、自分の腕で身を守ろうとするが、

ドス！

賊「ぐああ…。」

ドサッ…

『…え?』

何が起こったかわからなかったが、賊に刺さった矢を見て、放った主を探そうと気配を探る。

すると、向こうの方から声を掛けて来た。

???「大丈夫か?…若いもんがこんなところで死んじゃあいかなぞ。」

そこには銀髪の弓を持った女性が立っていた。

『…有難う御座います。助かりました。』

また賊が襲いかかって来ないうちに、周囲を警戒しながら立ち上がる。

『…ところで、貴女は…っ!』

女性が何者か聞こうとしたときに、女性の背後から賊が弓を引いているのが見えた。

「???」…なんじゃ?…どうかしたか…っ」女性も気付いたのか、
反応しようとするが、無情にも矢は放たれた。

ガシィ!

しかし、賊の手から矢が放たれると、目にも留まらぬ速度で女性に
近づき、矢を掴み取っていた。

「大丈夫ですか?」

いつもの笑みを浮かべて、女性に問い掛けた。

「???」お…おう。すまんの。」

その答えを聞き、内心で安堵の溜め息を吐くと、矢を放った賊を睨
みつけ言い放った。

「私の恩人に手を掛けようとは…命が要らないようだな…」。

自分を助けてくれた恩人を殺そうとした賊に殺気を向けると、神か
ら貰ったもう一つの能力を発動させる。

（このゴミは殺す……！魂も残してはやらねえ！！）

その力によつて、持っていた矢は粉々に碎け散り、自分の武器である両刃槍も神を殺した時のように禍々しく変化した。

賊「あ……ああ……。」

恐怖によつて喉は引きつり、まともに声を出すこともできない賊に、死刑宣告をした。

『……覚悟は……いいか？』

賊「あ……アあアアあ！」ス……

ブシュウウ！

気付くと賊は斬られており、凄まじい切れ味によつて、音も立てずにバラバラになっていた。

『……………。。』

無言で女性のそばに戻ると、フツと表情を和らげ女性に言った。

『先程は助かりました。有難う御座います。…私は張宮と申します。貴女の名前をお聞かせ願いますか？』

礼儀正しく挨拶をして、女性に名を訪ねる。

黄「…儂の名は黄蓋じゃ。儂の方こそ助かった、礼を言つぞ。」

黄蓋も助けられた礼を言い、お互いに頭を下げる形になる。

『「…ぷっ」』

吹き出したのは同時だった。

『くくく…ふう。すみません。…私の事は境と呼んで下さい。恩人に真名を預ける事もしないなんて、私の信条に反しますので。』

いち早く落ち着いた境は、まだ笑っている黄蓋に真名を預けた。

黄「はっはっは！…はあ、そうか、それでは儂も助けてもらっておるからの、儂の真名は祭じゃ。これからはそう呼んでくれ。」

漸く落ち着いた祭からも真名を預けられ、和んでいると、一つの気配がこちらに向かつてくるのを感じた。

清「境〜！祭〜！」

清蓮である。

『おや。清蓮さん、どうしたんですか？そんなに慌てて。』

走ってきた清蓮に向かって問いかける境。

清「どうかした？じゃないわよ！見てたのよ！二人とも間髪だつたじゃない！」

どうやら境や祭が危なかった場面を見られていたようで、清蓮は立腹である。

『いやはや…まあ、失敗は誰でもあることですし…ここは広い心を持って、ねえ祭さん。』

良い言い訳が思い付かず、祭に助けを求める境。

祭「そ…そうじゃぞ！堅殿！こうやって生きていることじゃし、今回は水に…ってどこに行くのじゃ境！」

祭に振った後忍び足でその場を離脱し、背を向けていた。

『いやあ……祭さん後は任せました！』

そう言つと脱兎のごとく走り出した。

祭「おい！待つのじゃー！」
がしっ

清「待つののは貴女よ？祭。」

そこには、笑顔だが怒気を放っている清蓮の姿があった。

祭「堅殿…？笑顔が恐ろしいのじゃが…？」

清「気のせいよ？…さ、逝きましよう？」

祭「堅殿！字が違っ…」

最後まで言うことはできず、清蓮の手によって引きずられて逝った。

祭「境〜！覚えとれよ〜！」

『…今何か聞こえた気がしましたが…。気のせいですね。』

祭の叫びを無視して先に進む境。

『…む？この気配は…。やっと徐晃さんが見つかったようですね。』

徐晃の気配を感じ、気配を感じる方向へ向かう。

『少々遅れていますし…急ぐとしますか。』

境は呟くと走り出した。

続
く
…

第十話ですね…（前書き）

間が結構空いてすみません！

さらに短いです！

次回はもう少し頑張ります！

それでは本編をどうぞ。

ゆっくりみていてね！

第十話ですね…

こんにちは。境です。

現在徐晃さんの気配を辿っているのですが…本陣に向かっているようです。

あの時の銅鑼は救援の合図だったようで、それを助けに向かったようです。

そんな訳で、私も遊軍の隊長として向かっているのですが…

『…敵がないじゃないですか…。』

全くいない訳ではないのですが、先程戦っていた時と比べると…居ないに等しい数です。

…おっと。漸く本陣が見えてきましたね。それでは急ぐとしますか。

『…間違いだった…？』

徐「はい。どうやら味方の砂塵を敵のものと誤認したようです。」

その返答を聞いて頭痛を感じた境は、頭を手で押さえ溜め息を付いた。

『はあ…。それで…もう用は無いと言う事ですか？』

徐「はい…。そのようですね…。」

あまりの理不尽さに若干怒りを覚えたが、今は戦の途中であり、敵も待つてはくれないので、踵を返し徐晃に言った。

『…徐晃さん。…この戦を終わらせるために、敵本陣に突撃を掛けたいのですが…付いて来て頂けますか？』

急にそんなことを言う境に、徐晃は不安を露わにして言う。

徐「し…しかし、我が隊で動ける者は残り千程度です！敵の本隊は約二万…どうやっても勝てる数ではありません…！」

その言葉に、境は少しも動揺せずに威厳を持って言い放った。

『私が…いや、俺がやる。敵本陣までの道は、俺が切り開こう。徐晃…お前が大将の首を取れ。』

口調が変わった境に動揺し目を見開くが、すぐに冷静さを取り戻し、境に問い掛けた。

徐「…勝算は…？」

その問い掛けに、間を空けずに返した。

『俺が居るんだ。負けるはずが無えだろ？…それに…』

片目を開き、真っ赤な瞳で徐晃を捉える。

『俺は神をも殺せる、瞬殺鬼だからな。』

徐晃は不適に笑う境に目を奪われ、真っ赤な瞳に見入っていたが、我を取り戻し頭を下げながら言った。

徐「…はっ！…どこまでもお供致します！」

そんな徐晃に、表情を緩め、口調を戻してから言った。

『有難う御座います。…そう言えば真名を教えてくださいませんでしたね。私の真名は境です。…これから共に死地に赴くのですから、これからは真名で呼んでください。』

真名を預けられた徐晃は、顔を上げ境と向き合った。

水「では、私の真名もお預けします。これからは水と呼んで下さい。」

『分かりました。それでは水さん、突撃の準備をお願いします。』

水「了解しました！」

そうして二人は、敵本陣に向けて進軍を開始した。

進軍を開始して暫くすると、敵本陣が見えてきた。

『水さん、手筈通りに行きますよ。私が先陣を切るので後に続いてください。』

後ろから追ってきている水に聞こえるように、少し大きめの声で言う。

水「分かりました！…御武運を。」

水はそれに答えるが、最後の一言は誰にも聞こえないように小さく呟いた。
しかし…

『分かっていますよ。心配性ですねえ。』

境にはしっかりと聞こえていた。
視覚を失った分、ほかの器官が発達したからである。

『…それでは…逝くとしますか！』

その言葉と同時に敵に向かって駆け出し、先頭の賊を切り裂いた。

『さあ、かかって来な！一方的に虐殺してやるよお！』

得意の両刃槍を振り回し、的確に急所を突いて命を奪っていく。

賊「舐めんじゃねえぞ！うらああ！」

しかし、相手も素直に殺されてくれる訳もなく、抵抗しようと武器を振ってくるが、

ブオン！

『んなもん当たるかよオ！黙って死んでろや！』ザシュ！

いつもよりも動きを速めて、敵の攻撃を縫うようにしてかわしながら、敵を切り裂く。

その姿は血にまみれ、赤い目を開き笑う様子は、まさに鬼か修羅のようであった。

『ヒヤハハハハハ！！どうしたア！？もオ終わるかよオ！！』

その姿に賊は恐怖し、自分だけでも助かろうと、我先にと逃げていく。

頭「逃げるんじゃないやねえ！戦いやがれ！」

そんな賊達に、大将と思われる男が声を張り上げた。

（やっと大将のお出ましか…。）

境が賊を五千程斬ったところで、標的を捉えた。

『…水！出番だ！』

水「はい！」

境が賊達を相手にしている間に、水を敵大将の元に向かわせる。

水「貴方の相手は私が務めます！御覚悟を！」

大斧を構え、賊の頭の前に躍り出た。

頭「小娘が！調子に乗るな！！」

頭は激昂しながら大剣を振り下ろして来た。

ガンッ！

その刃を受け止めると、力で押し返し、隙ができた相手に斬りかかった。

水「貰ったあ！！」

ズシャア！

隙を突いた水の刃が、敵を肩口から両断した。

頭「が…ああ…。」

ドサ…

水「敵大将、討ち取りました！」

ウオオオオーーーー！！！！！！！！

水が名乗りを挙げると、味方から勝ち鬨が上がった。

（終わりましたか…。 案外呆気なかった気もしますが、今はどうでも良いことですね。）

そんな事を考えていると、水がこちらに駆けよってきた。

水「隊長！私やりましたよ！これも全て隊長の御陰です。有難う御座います！」

そう言うと、ペコリと可愛らしく頭を下げた。

境は微笑むと、その頭に手を置き、撫でながら言った。

『私だけの力ではありませんよ。水さんも頑張りました。少しくらい誇っても、罰はあたりませんよ。』

その言葉を聞き、頭を上げると、嬉しそうに微笑んで、

「はい！」

と元気よく返事をした。

その後、首を持って帰還した水に、華琳が褒美だと言って迫ろうとしたのは、また別の話。

続く…

第十一話ですね…（前書き）

遅くなりました！

またもや短い…

今回は感想で台詞の前の名前いらなくなっ？っていうのがあったので実践してみました！

見づらかったら言うてください。

第十一話ですね…

はあ…あ、おはようございます…。

え？元気がないって？

そりゃあ、一日中華琳さんに説教でしょう…。

途中から清蓮さんが参加してくるでしょう…。

祭さんが酒呑もうとか言ってくるでしょう…。

最後に恋さんが入ってきて、華琳さんに「こいつ誰？」って聞かれて、答えようとしたら「……………今日…した。」とか色々端折って言うもんだから、「境…ちよつといいかしら…？」って殺気まき散らしながら言ってきて、誤解を解くのに時間がかかったでしょう…。

しかも途中で「……………とっても、激しかった…。」とか言うから更に華琳さんの機嫌が悪くなるでしょう…。

ああ……

…うぜエ…

…はっ!?

今私は何を…?

まあ考えない方が良さそうですね…。

それじゃあ、そろそろ現実を見るとしますか…。

「ちょっと？聞いているのかしら？」

『あ…はい。聞いていますよ?』

「じゃあ、私が今なんと言ったのか、答えて貰おうかしら。」

突然（境にとつてだが）の質問に頭の中をフル回転させて、考える。

『…今日も可愛いですね華琳さん。』

「…はぐらかさないで頂戴。…それで?聞いてなかったんでしょ?」

咄嗟にはぐらかしてみるが、一瞬で看破されてしまった。

『…いえ…まあ…その通りです。』

「はあ…。仕方ないわね。もう一度言っただけから、よく聞きなさい?…貴方には、」

私の軍に参加して貰うわ。」

………は？

『…とうとう呆けたようですね…。以前にそれはできないと言ったじゃ無いですか。』

呆れ顔で華琳に言うと、

「覚えているわよ。…貴方の村に一部の兵を駐屯させるようにして、村の警備に当たらせるわ。そして貴方は私の城に来て欲しいの。…どお？悪くは無いでしょう？」

華琳にも考えがあつたらしく、自分の考えを境に提案（強制？）してくる。

『…私に拒否権は？』

「あると思うっ。」

『…はあ。』

華琳の言葉に半ば諦めつつ、自分の村について考える。

（…私と神楽爺の約束は、「私が」村を護ること…。…しかし、私が華琳さんに付いてしまうと、約束を違えてしまう…。…どうしたものでしょうかね…。

…！良いことを思い付きました。）

「…どうかしら？」

境が考えを纏めたと同時に、華琳が不安そうな瞳で聞いてくる。

『…分かりました。引き受けましょう。』

その言葉に、花が開いたような笑顔を見せる。

「ほ…本当！？『但し条件があります。』…何かしら？」

喜ぶ華琳だったが、またもや不安そうな顔になる。

『まあ大した事じゃありませんよ。…まず一つ、村の税は今まで通りに。二つ、村の開拓を手伝い、住民の安全を絶対的に保証すること。三つ、私を客将として扱い、定期的に村に帰ることを認めること。…この三つです。』

「二つ目と三つ目はできるけど…貴方の村の税はどのくらいだったのかしら？」

華琳が疑問点を聞いてくる。

『まあ、普通の村の一割程は安かったですかね。』

境はあつけらかんと言うが、当時は悪人面の役人（ダジャレじゃ無いですよ）が来て、馬鹿みたいに高い税を要求してきたが、その役人に肉体的なOHANASHIをして、ここまで下げさせた訳だが…。

「…そのくらいなら許容範囲内ね。問題ないわ。…ところで、貴方の村の人口は？」

『…この前赤ちゃんが産まれたので…三十人程ですかね…?』

自信がないのか、疑問系で華琳に答える。

「私に聞かないで頂戴…と言うか随分と少ないのね?」

それに対して、若干顔を俯かせながら境は言う。

『…最近は住民の高齢化が進んでいまして…。今年も老衰で亡くなった方が三人もいます。』

「…それじゃあ、そのあたりも考慮しながら、開拓を進めるとしましょう。…これでいい?」

その言葉に笑みを浮かべると、臣下の礼をとった。

『…有難う御座います。これより、曹操殿に忠誠を誓いましょう。』

ここに、魏所属の傭兵が誕生した。

第十二話ですね…（前書き）

お久しぶりです。

久しぶりに書いたので短いですが、ゆっくりしていったね。

注意

書き方を変えました。これがオレ流！誰にも止めることは出来ない！

第十二話ですね…

皆さんこんにちは。境で御座います。

現在私の村に夏侯姉妹がいらしているのですが、只今私は絶賛逃走中（現実逃避）で御座います。

「境——！！私と勝負しろ——！！」

何も見てないよ？（心眼使えば視えます）

……私はご存知の通り盲目でして、何も見えないんですよ（現実逃避）。いえ本当に。

「何処にいる！！境——！！」

……何も聞こえてませんよ？いえ本当に。

……ああ。空が青いですね……。 （現実（ry）

「見つけたぞ境！勝負しろ！！」

「壁——」 「ワタシ境違うヨ？人違いじゃナイカ？」

「む？そうか、すまなかったな。何処だ——！！境——！！」

「（ー＋、）フツ。完璧ですね。今のうちに移動を…」

エセ中国人の口調で春蘭を騙すと、その場から移動しようと試みたが、走り去っていこうとした春蘭とは別に、背後から刺客が現れた。

「姉者、騙されるな。この男は間違い無く境殿だ。」

……なん………だと？

勝利（？）を確信していた境は、背後から現れた刺客（秋蘭）に気付くことができず、秋蘭によって春蘭がこちらに気付いてしまうミスを冒してしまった。

「なにい！！私を騙したのか！？もう許さん！勝負だあ！！」

「フフ…。姉者は可愛いな。」

秋蘭さん暢気過ぎるでしょう？

「少々待つて下さい。春蘭さんの相手をするのは構わないのですが…秋蘭さんは、私に何か御用があったのでは無いのですか？」

「ならば直ぐに…！」

唸る春蘭を牽制しつつ、ここに秋蘭がいる理由を聞いてみる。

「うむ、実は華琳様より、境殿を城に招待するように仰せつかったのだ。同行願えるか？」

なる程、そう言えば前に城に来るよう言われていましたね………すっ

かり忘れていました。

「……分かりました。しかし、この村に常駐する兵はいつ来るのでしょうか？」

そう。前に華琳との約束で、自分が手を貸す際に村の警備を任せる兵を寄越すように言っただが、黄巾の連中の動きの所為で兵が裂けない状態なのだ。

境にとって優先されるのは、華琳への手伝いよりも村の安全であり、それを保証されなければ村を離れる事が出来ないのだ。

「安心してくれ。先程、今日の夕暮れ前に到着との伝令があった。兵の到着と同時にここを発つ予定だ。」

「それならば分かりました。御同行致しましょう。」

良かった。これで、多少の憂いは残るが、問題無く任せられるでしょう。

「そうか。急で済まないな。何せ今は少しでも手が必要な時だ。我々がここに遣わされたのも、面識のある方が境殿を連れて帰るのが早いとの考えがあったのだろうしな。」

「いえいえ、そんな大切な時期に兵を裂いてくれるのですから、私の方から感謝しなければならぬでしょう。」

「済まないな。」

「……………うっ…しゅうらん。無視しないでくれえ。」

おっと、忘れるところでした。

「申し訳有りません春蘭さん。少々長話をしてしまいました。それでは、兵の皆さんが来るまでゆくりしていつてn……ゴホンッゆくりしていつて下さい。」

そう言うのと、二人をもてなす為に自分の住まいへと案内した。

……おかしい発言？そんなものありませんでしたよ。

しばらく談笑していると、沢山の気配を感じ外へと出ると、まだ遠いが十分見える位置まで来ている曹操軍の姿があった。

「到着したようですね。それでは参りましょうか？お二方。」

「その様だな。境殿は私の馬に乗ってくれ。盲目では、馬を操れないだろう？」

実は三つは出来るんですがね。まあずっと心眼を使うのも、かなり疲れますからお言葉に甘えましょう。……下心はありませんよ？

「有難う御座います。お言葉に甘えさせて頂きま……境！秋蘭に触れたら殺すぞ！」……す。どのように乗れば良いのでしょうか……？」

無茶な事を言う春蘭に振り回され、その後もあーだこーだと言っていた春蘭だが、

「境殿、姉者は放って置いてくれて構わない。」

という春蘭にとっての地獄宣言を食らい、大人しくなったところで移動を開始した。

第十三話ですね…（前書き）

じゅんいくが変換できない（´・ω・｀）

まあしょうがない！↑開き直り

まあ今回は桂花好きの方にはオススメしません。自己責任でお願いします。

それでは
ゆっくりみていてね！

第十三話ですね…

こんにちは。境です。

現在夏侯姉妹に連れられ、陳留に來ています。目的は言わずもがな華琳さんに会うためですので、大きな部屋に案内されたのですが……

「華琳様！こんなひ弱そうな男が、何故必要となさるのですか！？私には理解できかねます！」

……歓迎されてはいないようです。

「桂花静かになさい。」

「ですが…！」

「桂花？」

「……申し訳ありません…。」キッ！

華琳に遮られた事を境の所為にしたのか、もの凄い目つきで睨んできた。

「…………。」

睨まれている本人は涼しい顔をして、その場に佇んでいる。

今敵意を剥き出しにしているネコミミフード？の少女の他にも、十数人の武官文官が居るが、その全ての視線も一部を除いて否定的な視線であることが肌で感じられる。

「皆にも話していたと思うけど、この男が前々から話していた張宮冷崩よ。」

「只今ご紹介に預かりました張宮 冷崩で御座います。本日はお招き頂き有難う御座います。」

丁寧な挨拶により、多少は視線が和らぐ。

「アンタが張宮とか言う奴ね？ウチの軍を割いてまで来させる価値も無さそうな貧弱そうな男ね。」

さっき睨んできたネコミミフードの少女が突っかかってきた。

「……そうかも知れませんね。ところで、貴女は？」境はサラリと流し、少女の名を聞く。

「フンツ！アンタみたいな男に名乗る名は持ち合わせてなんかn」「桂花？」……ジュン文若よ。気安く呼ぶんじゃ無いわよ！？汚れるじゃない――！」

「……はい、分かりました。他の方々もお名前を聞かせて頂けませんか？」

…自己紹介中……

「では、これから宜しく願います。」

自己紹介も終わる頃には敵意のある視線は、二つ程に減っていた。これも境の人心掌握の技のなせるものである。

「それじゃあこれからの話をするわね。最近出沒の頻度を増している、黄巾の賊だけど……」

「はい！密偵によれば、出沒する範囲から敵の拠点を特定する事に成功いたしました。敵の数は……」

華琳の言葉を桂花が引き継ぎ、賊の討伐の段取りを決めていく。

「………となっています。ですが…一つ問題が……。」

「何かしら？」

桂花は汚らわしい物を見る目で境を見ると、語気を強くしながら話し出した。

「そこにいる張宮をここに連れてくるために割いた兵ですが、その所為で兵の数が少なく、行軍に不安が残ります。やはりここは兵を戻し、万全の状態で進軍する事を提案します。」

その事に反応したのは、華琳ではなく境だった。

「……それは私の村を手薄にするという事ですか？私がここに来る条件に、村の安全を保証するとあった筈ですが…貴女はこれを反故にするつもりですか？」

いつもの張り付けたような笑みの奥に、付き合いが長い者にしか分

からないような若干の違和感を含ませながら桂花に問い掛ける。

「気安く話しかけないで！今回出てきた賊の周辺の村は数百人規模の大きな村なのよ？アンタの村みたいな貧相な村を警護するより、賊周辺の村を警護した方がいいに決まってるじゃない！」

桂花の言い分は尤もである。一を切り捨て九を助ける、この時代の理になかった事であるが、桂花の間違いはそれを境に言ってしまう事だろう。

「貧相…ですか。まあ数百人の村に比べれば貧相でしょう…が、この村は先代から守り続けてきた村ですので、簡単に切り捨てる事は出来ません。」

「その先代も頭が悪かったようね。他の村と併合すれば「取り消して下さい。」は？」

「先代を知らない小娘が、あの人を侮辱する事は赦しません。」

先程の違和感と間違える程の僅かな殺気を膨らませ、桂花に向ける。しかし、桂花の男に対する気性やきつい言動がここで仇となる。

「何よ！アンタみたいな、村の警護に軍の兵を使うような非常識な事を言う奴を自分の跡継ぎにするなんて、よっぽどの非常識か馬鹿に決まって…」
「桂花！！ッ！春蘭！！」
ガキンッ！！

「…る…え？」

いつの間にか桂花の目の前まで来ていた境は、杖を短剣にして切りかかっていたが、いち早く気付いた華琳と春蘭のおかげで命をつな

ぎ止めていた。

「境、ごめんなさい。剣を引いて貰えるかしら……。桂花、貴女も謝りなさい！」

「いえ…お構いなく。……春蘭さん、私はゴミを掃除するだけなので、少しどいていただけますか？」

「華琳様の命令だからな！それに、お前ともう一度闘いたいしな！」

ギリギリ……

こうして話している間にも、両者の武器は競り合い、金属の擦れる音が聞こえている。

しかし、この均衡はすぐに崩れた。

「ハアアアアア！！」

ギヤリイイ！

やる気を出した春蘭の力により、境の身体ごと弾き飛ばす。

元々、境は力は春蘭に劣っている。先程まで力が均衡していたのは、境の武器が短剣という力の伝わりやすい物で、春蘭の剣の柄から離れた場所と迫り合いをしていたからだろう。

ザザアア

何とか宙で体勢を整え着地すると、無言のまま春蘭に向き直り、静かに問い掛ける。

「……春蘭さん、どうしても、退いては頂けませんか…？私はただ、

私の師であり、義理の祖父であり、育ての親である人を馬鹿呼ばわりしたゴミクスを、私の手で処理したいだけなんですよ。」

言葉を連ねていくにつれて殺気が膨れ上がり、後ろにいる桂花の顔から血の気が無くなっていく。

「クッ…だが！私も華琳様の命に背くつもりは無い！」

殺気に気圧され冷や汗を流す春蘭は、ただ主の為にその場を動かこうとしない。

「……仕方ありませんね……。」

境が行動に移そうと武器を構える。

「あなた達！そこまでにしなさ…バンツ！！」「失礼しま…す…。」
……境、少しだけ殺気を抑えて貰えるかしら。」

傷だらけの兵を見て、ただ事でない事を理解した華琳は、境に制止の声をかけ、事態を把握することに勤める。

「報告…します。…国境に、約五万の、賊が現れ……関を突破後、西に向かい進軍中です…！」

その言葉に華琳は驚き、急ぎ兵の準備を行わせようと声を上げようとするが、それよりも先に境が焦ったように兵に声を掛ける。

「貴方！それはどこの関ですか！？」

「こ…ここから真っ直ぐ東にある……関です…。」

それを聞いた瞬間、境はその場から駆けだしていた。

ここから東にある、自分の村に向かって。

第十四話ですね…（前書き）

ハイどうもお久しぶりです。

今まで何をしていたのだった？

……ちょっとだけ地面が揺れただけですよ。

…ん？神は地上にいるのだった？

H A H A H A H A！ちょっと下界旅行をネ。

別に住まいが東北なんてことはナイヨ？神は天界にイルノダカラネ！

まあ私の事は気にせず、
ゆっくりみていつてね！

第十四話ですネ……

足が重い……

だが、この脚が千切れたとしても、歩みを止めてはいけない。

一時間一分一秒でも早く村に着き、ゴミ共から護るためにも……！

現在、境は陳留から東に位置する自分の村に向かって疾走していた。息も切れ、汗が全身をつたい、足がもつれる。

体力は限界に近く、心眼の発動も困難になってきた頃、遠くに自分の目的地がミえてきた。

「ハア……！ハア……！よう、やく……ミえてきました……ね、ハア……！……っ……！マズい！」

境がミたのは大量の砂煙。そして聞いたのは金属と金属がぶつかり合う音、怒声、悲鳴、断末魔。

それに気づいた境は、限界に近い身体に活を入れ、村との距離を縮めて行く。

間に合え！私の身体などどうなってもいい！村人が無事ならそれで

…！！

しかし、到着した境がミたものは余りにも無惨な曹操軍の兵達、半壊した建物、村人の亡骸。

まだ戦闘を行っているのは百人前後で、他の兵達は皆息絶えていた。

ドクン！

…また護れなかったのか…？

「なあにぼさつとしてんだあ！？」

境に気づいた賊は、多くの人を斬ったであろう血の付いた剣を振りかぶり、境に向かって振り下ろした。

…つるせエ

杖を短剣に変えると、視認できない程の速度で首を裂き、首が地面に落ちる前に近くにいた賊の首を切り裂いた。

……こいつ等が村を襲ったのか？
こいつ等が…

ドクン！！
コイツラガ！！

賊を認識した瞬間、大量の殺気を放出した。

神を殺したとき、余りに身勝手な振る舞いに殺意を覚えた。

昔、賊の頭を殺したとき、自分目から光を奪ったのに殺意を覚えた。

祭を助けたとき、自分の恩人を殺そうとした奴に殺意を覚えた。

そして今は、大切な村を自分から奪ったこいつ等を、一人残らず

殺したい

side 華琳

境が飛び出して行った後、私達も急いで戦の準備をし、駆け足で境を追いかけた。

編成した部隊は、曹、夏侯、ジュンの旗を掲げている。夏侯の旗が一つなのは、城に秋蘭を残し留守を任せているからである。しばらく行軍していると、春蘭が近づいてきた。

「華琳様！私の隊だけでも先行させていただきませんか？このままでは手遅れになってしまいます！」

春蘭の提案も尤もだけど、一つあまり思わしくない事があるわね。

「春蘭、ここから境の村までまだかなり距離があるのよ？着いたときには疲れて戦えませんか？話しにならないわ。」

「ですが！」「それに急ぎたいのは貴女だけじゃ無いのよ、春蘭。
…わかりました。」

でもこのままでは間に合わなくなるかも知れないのも事実。

だけど、一人のために軍を危うくさせてしまうのは、王としては失格もいいところ。

村には私の兵が居るから、数刻は保つ筈…。しかし、兵の差がありすぎるからのんびりとしてもいられないわね。

「春蘭！疲れない程度に行軍を早めさせましょう。桂花、村に着いた時の為に策を考えて置きなさい！」

「「御意！」」

二人にそれぞれの指示を出すと、これから向かう方へ視線を向け、小さな声で呟いた。

「雲行きが怪しいわね…」

side 境

何人殺しただろうか。

元々ここまでの道のりで体力的に厳しい物があつたが、心眼を維持できなくなり、聴覚だけに頼らなければなくなる程に、身体を酷使しているが、敵が減っている感覚は無く、この時間が永遠に続くのかと思っていた。

「スウ…こんなモンか屑共…。俺はまだ生きてンだぜエ？」

自分の限界を悟らせないために、小さく息を整えると敵を挑発し、まだ戦えることを相手に示す。

「剣でやるからやられるんだ！矢で射殺しちまえ！！」

賊の中にも存外頭のいい奴が居るようで、いつまでも仕留められない事に苛立ったのか、遠距離からの攻撃を指示する声が聞こえてきた。

チッ！面倒なことじゃがって

ヒュヒュン！

カッカッ！

だがこんなもんで俺を止められると思ったのが、運の尽きつてもんだぜ？

飛来した矢を切り落とし、飛んできた方に狙いを定め一気に跳躍す

る。

「ウゼエ事してんじゃねえよ！ヒヤハハハハ！」

着地の瞬間に弓を持った賊を切り裂き、崩れ落ちる賊を前に蹴り飛ばし道をつくると、再度周りの敵を殲滅しながら前進していく。しかし、そのとき

……すけ……

小さかったが何かが聞こえた気がした。

だれ……けて

……この音は……？

それに気づいた境は、賊から一旦距離を置き、警戒しながら耳をすませる。

だれか……けて

誰か助けて！

「っ！……！どけ屑共！道をあける！！」

確かに聞こえた助けを求める少女の声。

その声が聞こえた方に向けて全力で突っ込み、僅かに見えた希望を信じて気力で再度心眼を開く。

身体の限界？関係無い。もう大切なものを無くさないためにも、そんな甘い考えは捨てる。

そして見つけた。

半壊の建物の前で座り込み、周りを賊に囲まれている少女。
それをみると、今にも少女に飛び掛かろうとしていた賊を蹴り飛ばし、少女を抱きかかえながら安堵の溜め息とともに問い掛けた。

「はぁ…怪我はありませんか？」

side 少女

私は毎朝行っている日課である、井戸へ水をくみに来ている。

お母様は家事などで忙しいし、お父様は畑仕事で朝は居ないので、私がお母様の代わりにくみに来るように決めている。

今日もいつもと変わりなく、平和な一日が過ぎるんだろうと思って
いた。

でも、それは脆くも崩れ去った。

「賊が来たぞおお！」

この村の守護者である張冷崩様が、刺史である曹猛徳様へ仕える条件として常駐していた兵士さんが慌てた様子で走り回っていた。

話によると、賊の数は約五千程で常駐している兵四千を使えばすぐ

に勝てるそうです。

しかし外にいと被害に遭うかもしれないので、家から出ないようにとの事でした。

私は安心していました。目の前の賊だけに目を向け、それ以外のことを考えていなかったのですから。

戦闘が始まると、猛徳様の兵が優勢だったそうです。

訓練を受けた正規の兵士と、元々農民だった賊が戦ったのですから、少数が少なくとも負けることは無いはずです。

しかし…

「敵の増援部隊が現れました！その数二万！村民の方は避難をお願いします！急いで下さい！」

二万の賊……

桁が違うその数に、戦いを諦め逃げることを優先させるようです。私は最低限の物を身に付け、お父様とお母様とともに急いで逃げ出しました。追い付かれてしまえば、全てを失うことになってしまいます。

それだけは避けなければ！

でも、逃げた先にも地獄が待っていました。

「野郎共！獲物が来たぜ！狩り尽くしちまえええ！！」

「ウオオオオオ！」

突如目の前に五千程の賊が現れ、村人達に襲いかかって来ました。

混乱する私達に次々と襲いかかり、命を刈り取っていく。

私達を護衛していた兵士さんは、なすすべも無く蹂躪された。

お父様とお母様は、恐怖で震える私の手を引き、賊を避けるように逃げ出しました。

恐怖を和らげる為か、何度も何度も励ましの言葉を受けながら走り続けると、回り込んだ賊が待ち伏せていました。

「ギャハハハ！親子揃ってどこに行くんだ！？」

お父様は私達の盾になるように立ちはだかり、私達に逃げるように言いました。

それを聞いたお母様は一緒に逃げるように説得しようと思いますが、その隙をついた賊がお父様に斬り掛かり、私達の目の前でお父様が殺されてしまいました。

喉から引きつった悲鳴が上がり、その声に反応した賊がこちらに振り向き、下劣な笑いを浮かべ近づいて来ます。

目の前でお父様を殺された衝撃で、何も考えられなくなった私は、ただ呆然と立ちつくし賊を眺めることしか出来ませんでした。

バシッ！

…っ！

頬に痛みが走り何が起きたのか理解出来ないでいると、お母様の怒声が聞こえた。

「何をしていますのです！早く逃げなさい！」

お母様は切羽詰まった顔で私に叫び、背中を強く押しました。

転びそうになるのを堪えて振り返ると、こちらを優しい顔で見つめ

るお母様と目が合い、何かを言いました。
声は聞こえないほど小さく、口の動きも注意しなければ分からない
ものでしたが、私は何を言っているのかわかりました。

幸せになりなさい

確かにそう言っているように思えたのです。

その後は振り返ることなく走り続け、殺されたお父様ともう逢うこ
とは出来ないであろうお母様の事を思い、涙を流すことしか出来ま
せんでした。

なるべく遠くへ、と走り続けていると、私は自分の村へ戻ってきて
いました。

これは私が意図して行った事ではなく、前へ前へ進んだ結果でした。

……何故？

そんな言葉が頭の中を渦巻き、誰に対してもない理不尽な怒り、
悲しみ、虚脱感がこみ上げてきました。

私はただ、お母様とお父様が言った通りに逃げ、生きようとしただ
けなのに…。

建物の中を物色し終えた数人の賊が出てきて私を視界に入れると、
口の端を釣り上げ、獣のような目つきで近付いてきます。

その時私は気付いたんです。

……いえ、正確には昔から思っていた気持ちに整理が着いた、というのが適切でしょう。

この世界には、理不尽しかなく、幸せを掴んだ者は必ずその幸せ分の不幸が降りかかる。

生きたいと思った者は死に、逝きたいと思った者は残る。

弱者は強者に虐げられ、強者は更なる強者に虐げられ、残った強者は孤独に死ぬ。

今までもそうだった。

困難を乗り越え、幸せを掴んだ矢先に不幸を掴まされた。

こんな世界に意味はあるのだろうか？

……私は見いだせない。

お母様、お父様、ごめんなさい。もうこの世界で生きることが出来そうにありません。

もしも、こんな世界に希望があるならば、教えて欲しかった。そして見てみたかった。

賊の一人がゆつくりと凶器を振り上げる。

でも、もしまだ助かるのなら、希望を見つけることが出来るのなら、私は……

生きたい！

「誰か助けて！」

バキィ！

ガシッ

聞いてくれたんでしょうか？

目の前にはこの村には居ないはずの方の顔が、いっぱいに広がって
いました。

「はぁ…怪我はありませんか？」

私は決めました。

この御方（希望）のために生きようと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5176o/>

恋姫無双～最強の傭兵～

2011年4月2日04時49分発行